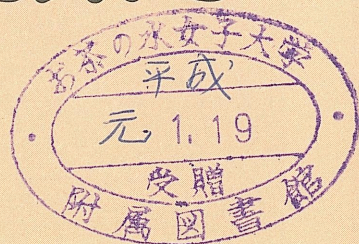


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

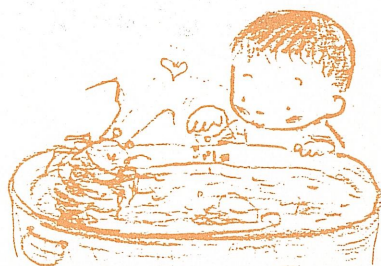
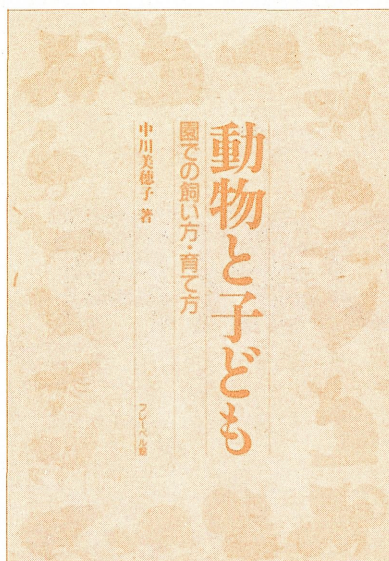
1989 2



第88巻 第2号 日本幼稚園協会

動物と子ども

—園での飼い方・育て方—



イヌやネコ、ザリガニ、カメなど園で飼育
したい動物の飼い方育て方を図解で説明。

動物飼育は、深い喜びと心を震わせる悲しみの体験
を与えてくれ、情緒を育てます。ただし、動物は生
き物であり、人間と同じように痛みや喜びの感情も
感じるものです。動物にとって人間の行為がどうな
のかを知ることは、より小さいもの、より弱いもの
への思いやりの心も育てます。動物と子どもとの楽
しい関係を育てるコツを教える一冊。イラスト多数。

A5判・168頁・定価1,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼 児 の 教 育



第88巻 第2号

幼 児 の 教 育 目 次

—— 第八十八卷 第二号 ——

© 1989

日本幼稚園協会

フロイトの家を訪ね、保育のことを考える……………津守 真…(4)

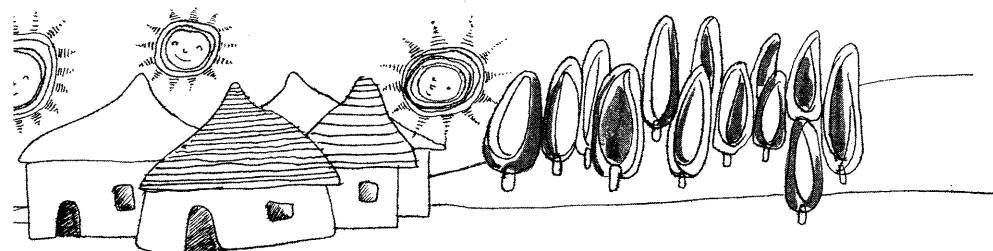
保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(二)……………土屋 とく編…(13)

子どもと(11)

冬と春のはざまに……………清水 光子…(30)

「思いかた」の練習……………豊田 一秀…(38)



本の紹介 『ことばの前のことば』……………森下 みさ子…(40)

幼児の社会性に関する一考察(2)

「遊びに加わる」ことについて……………上垣内 伸子…(41)

南の島の子どもたち(6)

ユタ的なこと……………浅野 恵美子…(48)

若いお母さんたちへ

アトラクタ便り……………はるにれの会 入江 礼子…(56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

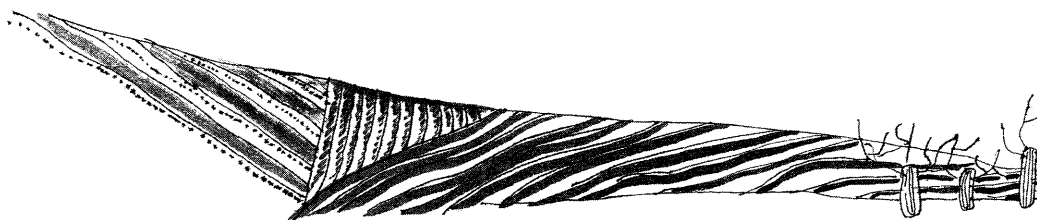
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・向山 陽子



フロイトの家を訪ね、保育のことを考える

津守 真

フロイトの没後、ちょうど五十年目にあたる一九八八年九月二十三日、私は、ウィーン九区ベルクガッセ十九番のフロイトの家で一日を過ごした。死の前年まで彼が四十七年間にわたって住み、また臨床の仕事をした家である。

フロイトの臨床は大人を相手にし、小さな室内でソファに横になった患者と対話を交わすものであった。その点では子どもと一緒に身体を使って動く保育とは性質がちがう。けれども、彼が医師の権威をすて、患者との誠実な人間関係に入ることこそその臨床の前提としたことは保育に共通である。そのときに患者は自分のありのままをそこに表現するようになり、それを思索の対象とした点も保育と共通である。保育の日日においては、フロイトに比べればとるに足りないささやかな発見と思索であるが、保育者自身が自分なりに考えてゆくことを彼の著作は励ましてくれる。フロイトの理論そのものよりも、彼が臨床に

向かう態度に私はひかれる。

たとえば、フロイトが次のようにいうとき、患者を子どもに、分析する医者保育者に置きかえるならば、ほとんど保育のことをいっているようにすら思えてくる。

「その場合、分析をする医者は、注意を万遍なく漂わせながら、自分自身を自己の無意識的精神活動に任せ、熟考と意識的期待形成を可能な限り避け、患者から聞いたことについては何も特別に記憶の中に定着させないようにし、そのようにして患者の無意識を自分自身の無意識で捉えるようにするのが、最も目的に適った態度であるということが、やがて経験から明らかになった。そうすると、事情がよほど不都合過ぎるのでなければ、患者の思いつきがいわばほめかしのように、ある特定のテーマの方へ手探りしながら近づいていることがわかった。」（フロイト「精神分析とリビドー理論」著作集11 P. 78）

保育者も、子どものある部分にこだわって見ていたり、こんな風にさせたいと強い期待をもって向かうと、子どものありのままの姿が見えなくなってしまう。子どもが無心になつて遊ぶ、そのときの子どもの心に寄り添って、こちらも無心になるときに、子どもは心の奥底の本心を表現してくれる。そうするには、保育者は、子どもの活動の全体に、その周囲をも含めて、注意を万遍なく漂わせて、子どもとの関係をつくり上げてゆくことを要する。

その際の治療（ここでは保育）の目標として、フロイトは次のようにいう。

「治療の目標として次のようなことを掲げることができる……。つまり、彼の自我の最

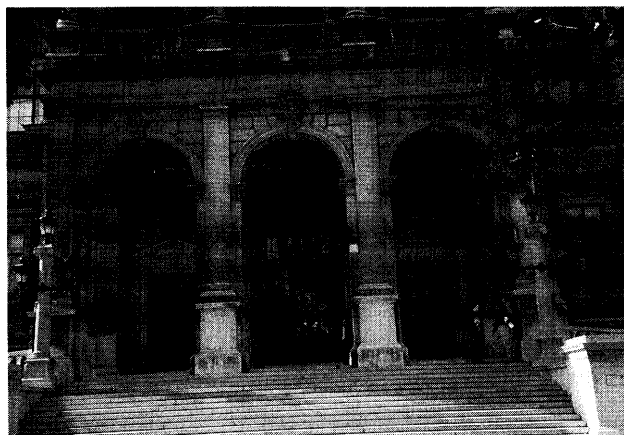
も広範な統一化と強化をもたらし、内的葛藤のための心的浪費を病人がしないですむようにし、病人の素質と能力から見て、彼がなりうる最良のものに彼を発展させ、そのようにしてできる限り彼を実行力のある、楽しむことのできる人間にすることである。」(同P.91)

このことは保育の目標にもあてはまると思う。子どもが自分で選択し、自分で判断し、できない範囲のことは他の人に助力を求め、未来の困難にも自分で向かってゆける自我を育てること、つまり、それぞれに応じて、「彼がなりうる最良のものに彼を発展させる」ことである。そうなったときに、人は生きることを楽しめるようになる。

つづけてフロイトは次のことを補足する。「病気の症状の解消は、……いわばおまけとしてこうしたことが生じるのである。分析家というものは、患者の個性を尊重し、彼—医者—の個人的な理想像に合わせて患者を改造しようなどという努力はしない。……分析を受ける者の主導性を目覚めさせることができれば、それが嬉しいのである。」(同P.91)

こんな困った行動がなくなったというようなことは、相手との関係をつくり上げることによって、相手の自我が育てられたことに伴うおまけだというのである。困った行動をなくさせようとするのが治療の目標ではないという。まして、大人の理想像に合わせて子どもをつくりかえることではない。保育においては、あらわれたことだけにとらわれて近視眼的にそれに対処する手段を考えていたのでは、根本を見失ってしまう。フロイトはそうなりがちな私を立ち止まらせ、もう一度人間を見直させてくれる。

▼ウィーン大学

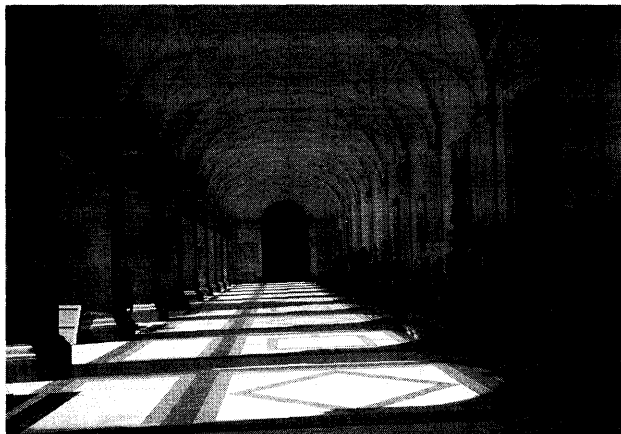


フロイトがこうしたことを考えつつ臨床を行っていた広くもない部屋と、それにつづく質素な書斎で、たくさんの展示と説明書をみながら、ときどき書斎の窓から内庭を眺め、私は落ち着いた一日を過ごした。没後五十年の記念の日というのに、三十分間ほど高校生らしい十数人の一団が先生に引率されて来た以外は、数名の見学者があるだけだった。閉館の三時になり玄関の扉を出ると、すぐ向かい側にもうひとつ扉があることに気付いた。

フロイトの住宅の玄関である。把手をまわしたがすでにその日は鍵がかかっていた。

翌日、私はウィーン大学を訪れた。リンク（環状道路）の曲り角に装飾建築の市庁舎に接して、大学とは見えない美術的な建物である。中庭を囲んで回廊が続き、中世以来、大学に貢献した教授達の胸像が並んでいる。そのいかめしい表情の像をひとつひとつ数十も見て歩くうちに、何と、ジグムント・フロイトの胸像があった。ユダヤ人であるために、また学問的正統性を欠く彼の理論の故に、正教授に任命されることを望みながら果たさなかったフロイトが、いま大学の功労者たちの

▼ウィーン大学回廊 この最右端にフロイトの胸像がある



れかが欠けていると黙ってフォークで指してたずねたというその部屋々々には、いまぎつしりと記録と説明書が展示されている。この住宅の部分の展示は、すべて一九三〇年代の新聞や雑誌の切抜き、写真、当時の社会情勢を告げる記録である。この時代の反ユダ主義、ヒットラーの脅威、ユダヤ人の強制収容所の不安、いまや体系をなしていた精神分析への疑惑や圧迫、これらに直面したのがフロイトの晩年だったことを、この家の展示は強

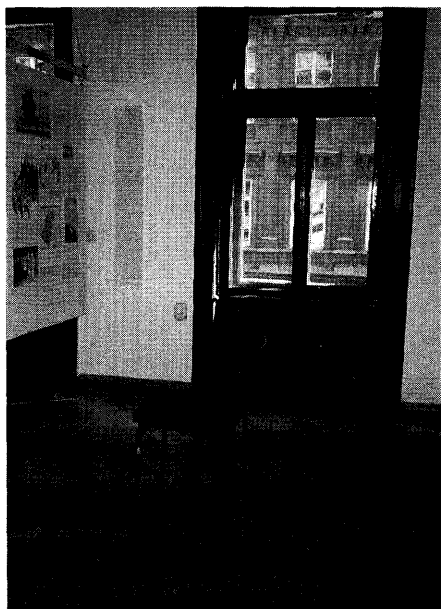
胸像群の中に加えられている。後に知ったところによると、この像は一九五五年二月四日にここに加えられたとのである。白亜の石の殿堂の中にこの像を見るのは、彼の長年住んだ粗末な家を訪れた後には不釣り合いな気もした。中庭の線でみながらベンチに腰かけて人の気配もない土曜日のひと時を過ごした。

ウィーン大学からフロイトの家まで歩いて十五分程である。前日には見られなかった住居の部分を見せてもらった。居間と寝室と子ども部屋は内庭に面しており、食堂はベルクガッセ通りに窓がある。彼は臨床の間にはここに戻り、家族と団欒し、夕食のときにだ

調しようとしている。「ある日突然、法律の保護の外に投げ出された」ことを発見したとき、人がさらされる状況をこれらの資料は語っている。それに加えて、下顎部の癌がフロイトの晩年を絶えず悩ませた。このような生活の中でも彼の自我は弱ることがなかった。そのころの次のような手紙の一節が展示されていた。「私の年齢になると、生きることは容易ではありません。だが春は美しい。同様に愛もまた。」（一九三六年五月二十四日、愛す



▲フロイト 家居間



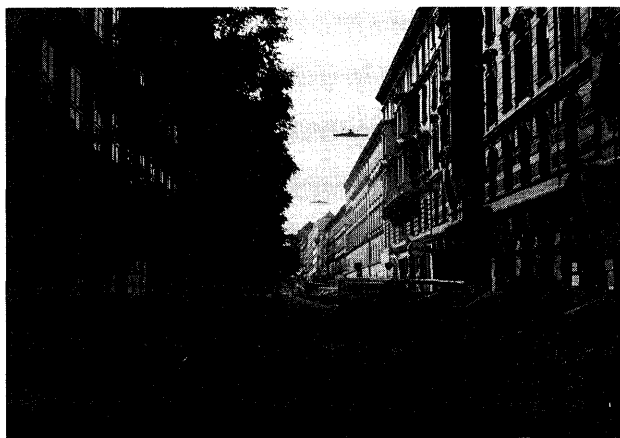
▶食堂

るH・D・へ)

彼がこの家を去ってロンドンに亡命することになった一九三八年の記録は、ほとんど目を追って展示されている。ウィーンを去ってパリに逃れた汽車の時刻表まで保存されていた。

フロイトの家の街路側に窓のある一室は「ミナおばさん」の部屋である。早くに未亡人となった、フロイトの実妹である「ミナおばさん」は、ほとんど生涯をフロイト家と共にした。五人の子どもと共に大家族をぎりもりしたフロイト夫人のことを私は考えた。

夜になるとウィーンの繁華街には、アコーディオンやバイオリンを弾く人々があらわれる。現代のロック風もあるが、私共に懐かしいポピュラーな古典曲をアコーディオンで鳴らす年輩の音楽家たちもある。私はどうしてもその前で立ち止まってしまふ。フロイトが好まなかった社交界のコンサートとは違う、このような街角の演奏家は、十九世紀末から二十世紀初めのウィーンにはあったのだろうか。翌朝、私は、フロイトの家から遠くないフランツ・ヨーゼフ駅から汽車でプラハに向かった。



▲ベルクガッセ通り

一週間の会議を終えて日本に帰るとすぐに、私は留守中のK男のはなしを聞いた。K男はここのところずっと私の弁当の包みをかばんから持ってきて食べていたが、私が不在の間、校長室の私の机の上においてあったフロイト選集を二冊かかえて歩き、昼になるとそれをテーブルの上において自分の弁当を食べていたという。自転車にのせてもらうときも、荷台とサドルの間にそのフロイトの本をはさんでいたのだと若い保育者が報告してくれた。私がフロイトの家を訪ねていたことなので面白く思った。何も神秘的なことはない。毎週一度の大学の講義に使うので私の机の上に重ねてあった本を、私の弁当の包みの代りに持って歩いたのである。

二年程前、K男が幼児のころに、理解しにくい行為がつづいたときがあって、そのときに私は、フロイトがゲーテについて書いた『詩と真実』中の幼年時代の「記憶」（フロイト著作集3、P. 318）と照らし合わせて考えたことがある。

そのころ、K男は手あたり次第に物を見えないところに投げこんだ。ラジエーターと壁との間のすきま、戸棚のうしろなどに、遊んでいた汽車やレール、いじっていた粘土、好きな絵本などを入れてしまい、それがひどい日には、無心になって一緒にについていようとしてみようとしてこんなにするのかと腹立たしく感じられるときもあった。そんなある日、滑り台と一緒に滑ろうとしたとき、歩きはじめて間もないK男の妹が歩いているのが滑り台の上からみえた。チラと一瞬K男はこれを見たと思ふのだが、K男は妹を見るのを避けるかのようにして屋内にもどった。そのとき、私はあのフロイトの著作を思い出

した。

ゲーテが幼いときのある日、父親が陶器市で皿や壺をたくさん買ってきた。ゲーテはそれを窓から往来に投げて次々に割った。向かいの家のいたずら小僧がもつとやれとはやしたてた。ゲーテは台所の皿までも窓から投げ出して割ってしまった。ゲーテにはそのとき赤ん坊の妹があったことを、詳細に考証した後、フロイトは、西洋の子どもたちが信じているように赤ん坊はこのとりが窓から持ってきたとするならば、邪魔な赤ん坊はまた窓から投げ捨ててしまえという気持ちで子どもの奥に動いていたのではないかと解釈してみせる。K男が物を見えないところに投げこんでしまうのも、妹を見ないですむように片付けてしまいたいという心の表現ではないかと私は気付いた。それまでK男は妹をいじめたこともなくあまりに紳士的なので、私はむしろ感心していたのだが、このことに気付いてみると思いあたることがいくつもあった。この解釈の正当さには別の議論があるにしても、このように考えてみると、それまでに腹立たしくさえ見えたK男の行為が、いとおしく思えるようになった。そうなったときにK男を見る私の目は優しくなったのだと思う。K男と私との関係は質が変わってきた。

久しぶりに私に会ったK男は、はにかみながら私に近づいてきた。その日一日私はK男と過ごした。弁当の包みを私のかばんから出したK男は、机の上のフロイト選集には手をふれずに私と一緒に保育室に出ていった。

(愛育養護学校)

保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(二)

記録 田村 薫

菊池ふじの

土屋 とく編

前号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齡前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一 自発性 二 具体性を幼児生活の特色とし、その生活原理を説く。

保育法原理は、

第一 自発的

第二 具体的

具体的—抽象的の対。幼児の生活を見てみると、一切の事凡てが、抽象的でない。

○ 抽象的とは、どんな事であるか。之は、何処までも空の様な気がする。空とは、この場合、事実、事物に対して云う。それ等から離れて来るのである。

抽は、抜き出すという意。これも手等で抜くのではなく、心の働きの抜きとるのである。

子供には心でぬきとる事は大抵は出来ない。子供はそれ自身の全体としては味わわずに何処か中庸をおとすものだ。

我々は実際の事物、事実を見るに注意を傾けて行こうとする。そしてその注意を向けたものを抜き取る事により抽象が生まれる。

その抽象によって抜かれた事実は、それそのものが事実から離れているものだから、かすかな弱き存在であ

る。

抽象的に頭に入れて、それを色々合わせて実物に対する概念というものをそこにおく。

この心でこしらえたものを「念」と云う。方々から抜き出して来ては、或る特殊な存在を生む（例・色の概念）。色というものは、どこにも存在しない。

色というものは見られぬ、見せられず、だから抽象と云うのは注意によって抜き出す。

だがこの実物とは何だろう。太郎も幼児も実物だろう。太郎の性格の中の如何なる方面に注意を向ける事によって抽象されるのである。

注意を向けると抜き出すことが出来、又捨て去り、そして抽象するのである。（実物に対して）

太郎の生活と云わば、太郎全体が、太郎のして生活して行かねばならぬ。手足だけでは違う。

愛と言うような立場から太郎を見ている時、抱いている時は太郎を全体として見てる。

我々は太郎を愛しているだけではない。教育しつつあ

るのである。

愛する事はそのもの全体に対するのであって、最も簡単にいえば、一緒に遊んでいる場合、一緒に生活している場合なのである。

又この場合には太郎を太郎として遊ぶのである。見るのである、生活するのである。

幼稚園で子供と遊んでいるのみなら簡単なのだが、教育せねばならぬ。

遊ぶ時には、太郎の全体と、自分の全体とが遊ぶべきなのである。

愛する時も両者の全体同志でなければならぬ。子供は他人にすぐ全体を持って来る事ができるが、大人は反対に全体的にぶつかると事が難しい。子供と遊ぶ事が楽しいと云うのは、全体が子供にふれた時なのである。

共に全体的にふれ合う事は何処迄も具体的である（愛しよう、遊ぶ、共に生活する）。

が、教育するためには一つの目的が入って来る。

目的を立てると云う事は、他を捨ててしまつて、或る

一つを抜き出さねばならぬ。

教育する時には目的を区別して見、そしてその目的の徹底するのが教育の意義あるところである。

目的を立てた以上徹底させねばならぬが、全体を全体として見るのでは駄目で、狙い所を区分する。

そして体育をねらう。体育教育、情操を目的とする情操教育等を云うのである。

体操は体を丈夫にするのが目的だが、手足・首等の運動を分けねばならぬ。

教育は相手を全体として取扱う事は少ない。部分的に行っている。

之は或る一方に注意を向け、或る点を抽象するのである。教育は抽象する傾向あり、が、次第に大きくになると、その教育に必要な点のみを働かす事が出来るようになって来る。

同じ相手をみるにしても美的見地から、又分析的見地からに分ける。

幼児は、自ら、自分を抽象する事が出来ない。だから

幼児に対しては、全体的に、具体的にあるべきだが、教育を考える我等は抽象的になる。

幼稚園の保育は一般の教育と異なり、あくまで具体的でなければならぬ。

保育の原理は、幼児性格の特徴をつかむ。

具体的↓さながら、あるがまま

注意を向けると注意を向けたその点が抽象できる。その上にあつて概念というものが出来る。ぼんやりとパパーとしているのを抽象と云うのでなくて、具体のぼやけているのを云うのである。

部分的に抜き出して抽象するのが教育である。故に教育は、人をどうも抽象的に取扱う傾あり。

本当の教育とはその人をその人全体として教育すべきだが、どうもぼんやりして徹底的にできないから部分的にやる様になって来る。

各学課目に分けるもその為である。

或る一点に徹底させようとすると、抽象的になる。教育そのものも、又、智・徳・体に分けてある。

小学三年頃より教育は部分部分に分かれ、その結果は抽象的傾向を存する。

被教育者も教育者と歩調を合わせねばならぬ。次第に人は成長すれば、自分で自分を分けて使う事が出来る様になって来る。

そして教育者とも歩調を合わせる。

幼児は自分を分用する事を知らず、何時も自己の全体をありのままとして、生活させている。

ここに真の幼児の特長がある。

自分を分けてゆく事の出来ぬ幼児に、教育の意義にかたより、分けて教育する事はいけない。

大人は可能だが、子供の分解はできぬ。

幼児には彼を全体として扱わねばならぬ。

幼稚園保育は分解的でないから、体育・知育・徳育と各抜き出して教育していく事は出来ない。

之が幼児教育の実に重要な事である。

自発性の事より云えば、幼稚園も大学も大差ないが、幼児には恰も自発性は持たぬものの様に思われるから説

くのである。

その人を全体として生かしてゆくと言う事は、先にある。彼等は、自己を統一している事も無いが、散ってもいない。そして彼一個人全体として一つに固まっている。

之が幼児教育の最も大切な事である。

幼児保育を抽象してしまう事は誤りである。

子供と遊ぶのは大切な保育である。

遊んでいる時、彼等は実にさながら、ありのままで、即、具体的である。

なまじっか教育しようとする、子供達が、あわれにも分解されてしまうのである。

遊んでいる時には、全体として現れる最上の場合である。

話を聞かせる目的は、聞く子供をして全体的にならせるが為である。

話す方は自己をまとめて話してしまう。

幼児が具体的なのだから、具体をこわしたくないか

ら、特別な教育と一種異なる保育というものをするのである。

第三章 保育法の則

わざわざ保育と言う語を用いて、教育という文字をさけたのは、前章の如き理由に依る。

教育を用いながらも、具体原理に基づいて、行われれば問題はない。

具体的に子供を、その全体として見る様に教育と言う語をさけたのである。即ち、この保育と言う語を用いて表わした特殊な方法なのである。

○原理と原則の差異

原理より原則の方が実際方法に近い物であり、前者は幼児生活の基にあるのである。原理と実際方法の間にあるのが原則。

原理は幼児生活に、固定しているものだから、動かす事は出来ないが、原則は方法に近いから、その位置が自由である。

如何に運用さるべきかは、研究家の取捨選択によるのである。

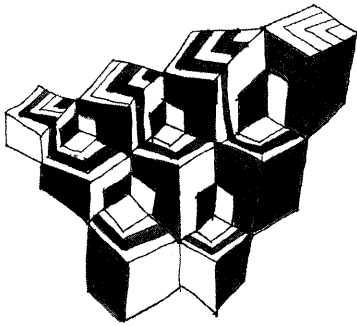
第一原則

◎ 間接（教育）の原則

昔の様に、教育者の思うままの型に入れてしまうと云う事ではなく、被教育者の生活をも考えて、こちらより手を出すのである。

そして幼児に向かって自分の力を、彼らの生活に及ぼし、影響させ加えようとする。

その力が大きい程、熱心な保母なのである。



保母たるもの、子供の為の横暴さがなければならぬ。

（昔と違い現代の教育者は、意志的でなく科学的である。幼児そのものの生活をも無視しない。尊重している。そして、ひたすらに押しつける頑固さが無くなった代わり、又その熱心さが子供の為のもので無くなる事がある。自己の意地を通す様な事がある。頑固な人と冷たい人がある。）

教育者が子供に対する非常な熱心さは、周囲の人が感激するのである。熱心さは、百パーセント出さねばならぬ。無制限でなくてはならぬ。

が、熱心さの子供に及ぼす影響はよいが、保育法の憲法、保育原理の一、たる自発性は、一体どうなる事だろう。

教育者は、教育者たる、又世間に対する任務上より、又親達の要求に依っても、熱心で無くてはならぬ。が、あまり熱心すぎては自発性が失われてしまう。

ここに於いて唯一の方法は、間接教育である。直接では、小さな熱心でも自発性が心配である。

我々の強烈な熱心さを、直接に及ぼしたら向こうは力

をひっこめる。こちらでは強烈な力を入れているが、向

こうでは、その力強さを感じない様にするものが良い。

その中へは、こちらの強い意志を入れて、その物に触れ、子供も亦、その物に触れる事によって、両者のびったりつく事をさせる。

子供が、そうしたく思う様に仕掛けて、先生の意志を露骨に表わすと云う事をしない。

青年教育は、人間同志の直接のふれあいではなくてはならぬ。青年は強烈な事をされて、しほむ様な弱い自発性ではない。反省できるのだ。

幼児は、その事が出来ないで、只外からの力のみで及ぼされる。之は自発性とは矛盾している。大人があのような子供を、思うとおりにする事は何でもないが、ここを考える事が難しい。

幼稚園に於いては、明日来る子を待ちうける事が大切である。

心の中のみでなく、物でも備えている事が大切。

その意志を一杯物に含めて待つ事が肝心である。

第二原則

◎ 相互教育の原則

両者の対等を意味する。この相互とは、子供同志の事を意味する。

先生と子供の意ではない。

間接教育の原則に於いて、先生が直接子供にふれる事のないようにする事は、自発の原理を重んじている為であったが、之、又同様に自発を尊ぶ為に相互教育をする。

子供等に相互の関係で生活させておいて、その関係と云う事を狙うのである。

この意味に於いて一種の間接教育である。設備や物を仲立ちにする代りに、関係を仲立ちにするのである。

それには子供等に関係生活を営ませてゆく、相互の生活を営ませる。

先生が子供を直接に教育すると抽象してしまうおそれがある。

そして具体原理に反する。

ところが相互生活に於いては、具体原理に逆らわない。子供同志が、子供全体を出して生活するからである。

物を間に入れる間接教育は、設備、品物を必要とする。が、之はそのままで相互生活が営まれる。

併し、相互の生活は自然に営まれるけれど、先ず一に妨げずという消極的な法と、更に営ませ様とする積極的な手腕が保母には必要である。

妨げないようにする事は特に知るべきでないが、昔よりの傾向では個人的に教育されて来たから、この事を長く無視されて来た。

これはスクール・メソッド、学校教育法の通則である。幼稚園に、之が通用されるべきではない。

保育の本質的原則は相互教育である。

幼稚園の机の位置等も之を考えてある。その事を考えて先生が（位置の事等）種々に工夫するのが幼稚園保育の第一条件である。

保育者たる者は、居て居ざる如く子供達のみをして相互生活を営ませる事が、最も良い事である。

相互生活は第一の意味に於いては自発を尊び、第二の意味では子供をして充分に生活させる。

子供が生活力を誘い出されて来るものに二つある。

一つは興味。（相手の方は向こうとしてのそのままの生活をしており、こちらだけがひきつけられていくこと。花に興味を持つとは、花自身はただそのまま、美しく存在しているのみである。）

即ち、相手の持つ実質に引かされる事、向こうからは仕かけない。向こうの本質に引かれる、絶対的態度とも云うべきもの。向こうの有する価値のみで感ずるを興味と云う。

故に我々の最も興味を持つのは、自然と芸術である。向こうからは何も働きかけない。

之に対してもう一つに、相対的關係（態度）と云うのがある。

之は向こうからも亦しかけてくるのである。

相対的關係になつてくれば、前者に対し、比し、ずっと人間生活が力強くなってくるのである。

が、又この相対的になる事は難しいのである。

大人が子供と、例えば遊ぶ事等は容易でない。故に子供同志は、真に相対的關係が出来る。

この時最も彼等の生活活力が表れるのである。一杯の活力を全部出す事が出来ない。

相互生活に小さい子が馴れて入るのは相当容易な事ではない。

子供にも大人にも入れるタイプと入る事の出来ぬタイプとがある。

相互生活を営めない様なものは、社会も営めないし、我々も最善生活をしてゆけない。

相互生活に於いては相手によるにあらず、自己の如何によるのである。

相互生活をする事によって保育法本来の目的が達する。

積極的に見れば保育の積極的。相互生活は自発を尊

び、恰も間接教育の如く先生と幼児間に或る者をおくと同様。

自発を妨げない事は、更に生活活力を促すと云う好結果が得られる。

間接教育に於いては、その中にある物に子供が興味を感じるので、物からは仕掛けないが、相互生活に於いては、互いに活力を出し合う事によって、更に一層高度な保育法が得られる。

第一の意味に於いては、相互の原則は一種間接教育に似ている。消極的に言つて、即ち自発性を損なわないのであるが、

第二の意味に於いては、物相手ではなく、互いに人の子同志が感じ合いつつ、やりとりしつゝ、促し合いつつ、生活するのである。

前者に於いてはその人一個人の全体のみしか出す事があるに反し、後者は互いに感じ合いつつ行つて互いに倍加されてゆくのであるが相互を命ずる事は又原理に反する。が、人間は、元來相互性を有するものである。

赤子や、乳児にはこれはないのが、幼児に至って次第に相互の能力、性能が出てくる。依従性である。

相互を楽しむ年、相互を求める年の子を利用して保育する。

子供の中には発達していない子は相互生活を楽しまない者がある。

例えば根本的に孤独性の子もある。あまり人間的でない人がある。やりとりの一方のみをする人もまた仲間を離れるのである。

斯様に相互生活を営むには容易でない。

伸びすぎた子（人間的にわがまま）いじけた子はいれにくい。

相手を対等に真実に考えれば喧嘩も出る。相互を味わう事の出来ぬ子は保育法の効果を充分にあげ得られぬ。

相互とは少なくとも三人である。二人だけでくんで群から離れているのは、二人とも相互に入れないのである。

余り大相互になってもいけない。それは全員が沈まっ

ているか、又はがやがやするか何れかである。

現在の当幼稚園の机の配置は、理想的なものである。

子供が自由に遊んでいる時は、自然に七、八人（勿論特殊な子を除き）多くても十人以下でグループを作っている。そこを利用するのである。

保母は大勢をまとめるでなく、揃えるのでなく、況んや引き離す等せずに、数人を数人として相互生活をさせるに、優れたマネージャーでなければならぬ。

眼や声によっても、又全体に対する感じが違うのである。調和的にさす事が大切である。

全体を単独に表すのではなく、そして一個人の力量以上の能力を発揮させる事が大切である。

Conducting Abilityを保母は有さねばならぬ。よき **Conductor** でなければならぬ。

が、先生は、その位置を考える。

勿論保母は必要である。が、その姿は恰も無いものの如く、天井や、縁の下にいて、いながら吊っているようであればならぬ。

第三原則

◎ 共鳴の原則

共鳴に向かうの気持ちを、うまくうけられ、こちらも同

じ気持ちになれて、他へ返す程の意。

共鳴とは、人間生活に於いても重要な原則である。人生の中に共鳴はあるべきだが、又それを統制していくものがなければならぬ。

幼児保育に於いてのみのものではないが、何故特別に原則として、取り出すのであるか。

第一

相手が弱いものであり、小さいものであって、己の心持ち、考え方、を弱くしか持ち得ず、始終何らかに共鳴されるのを待っている。

我々大人は共鳴を持つ事は満足であり、持たたいとは思うが、無くとも過ごす事は出来る。

幼児は共鳴を是非必要とするのである。幼児は何かに

つけて大人に訴える。言いかえれば甘ったれるのである。

その訴えに依って相手が共鳴してくれば、己の気持ちが更に判然としてくる。彼等は共鳴なくしては、自らの生活をして行く事は出来ないのである。四方から求めるのである。

自分で自分だけの心の生活を、していけない。共鳴せられる事に依って、辛うじて子供は生きるとも言いうる。

又、相手が強い心であったなら、我々は一も無く共鳴させられずにおられないが、子供の気持ちは「淡くして過ぎゆくもの」であり、微かなものであるから、共鳴する事を任務として心掛け、それを原則化する程でなければならぬ。

共鳴してやろうと云う態度がなければならぬ。が、こんな心持ちで共鳴する事は出来ない。

即ち、あれ程、かすかなものに対してまでも共鳴し得る様な気持ちが此方に欲しい。かすかなものに共鳴し得る

る様になっていた。

幼児は他に共鳴して貰えば、そこに自分としての本当の嬉しさが身につく。

彼らが持っているもの、かすかなれどかねて持っている生活を育てるには、これより他に方法なし。

第二

第一の事を裏返しにしてみるもの

我々が子供の側にいて、只子供とあるがままの親しさでいる時には、原則として事々しく持ち出す程の事なく自ら共鳴出来る。

好きな子と心を空しゅうして相接している時には、共鳴できるのである。

からっぽとは入るべきものの入る余地があるという意味なのである。

心を空しゅうして人に接すると云う事は、人の気持ち、云う事がすぐに心に入って来る様に用意せられている状態にある事を云う。

あまり自分の事は考える事なしに側にいる者の気持ち

をすぐ受け入れられる状態。

自分を思う我儘な気持ちで一杯の時は、他の気持ちの入る余地は無いのである。が、我々には教育してやろうとする気持ちは、当然一杯にある。が、そればかりがつまっている時は、又目の前の子供の気持ちを受け入れられぬ。

自分の中心の考えや睡眠不足等で、子供の気持ちを受け入れられぬ。

子供を教育してやろうという気持ちで一杯になり、現在の子供の気持ちに共鳴してやるのを妨げる事は折々ある。この事は教育の世界に多い事なのである。

我々は難しい立場にある教育者なのである。

教育者に伴い易い弊たる共鳴できぬ事を避ける為に、原則として云う必要がある。先を見る為に、現在を忘れる弊がある。

彼を教育してやろうという気持ちは、心を空しゅうするに非ず、共鳴に非ず、彼を批判し、彼を裁くのである。

現在をそのままあるがままに受ければ共鳴だが、教育者は多く批判し審判する事がある。相手が大きければ、

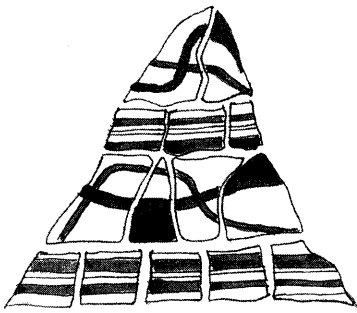
批判し裁いても却って生徒の方からは仕かけられる事があるのである。が、相手はあの幼児である。彼等を批判し裁く事は許されない。あの弱い幼児を裁いたりする態度は、教育者としての往々の弊である。

故に共鳴性を多分に持っている察しのよい人間でなければならぬ。

共鳴は如何なる教育効果を有するか。

先ず共鳴してその後批判したり指導したりするのは許されること。

1 には直ちに批判して共鳴の必要を認めないで除いてしまう。



2 には子供をわかってしまっているものとして除いてしまう。

教育効果

(1) 子供が嬉しい。この喜びは、外面より物的に与えられる喜びでなくて、内面的の眞の喜びである。斯様な意味で、子供を嬉しがらせる事は重要な事なのである。

(2) 幼児の心中には、育ててやり度くないものがある。

子供の心中の望ましくないものを、早く除いて、望ましいものを育てるのは、普通の子供である。教育心中に生えている善意の芽は、同様なもので、心の中で張っている根は殆ど同一のものである。故に子供のいたずらもその心の中をすかせば、実に善良な美しいものなのである。

その小さい同じ様な芽の中、悪いものだけを除こうとすれば、往々にして育ててやり度いい方のもので取ってしまう。

故に悪いものであっても、それを除こうとする方法は止めて、又根を掘る事も止めて、上から良いものだけの

成長出来るような光線を与えるのである。

その太陽こそ共鳴なのである。故によい点には、どんな共鳴して悪い点を見返す暇もない程にする。斯様に教育方法としても用いられる。

(1) の場合は共鳴を人間として考えたのである。

子供の生活は何れも善悪の混じったものである。一つのものから出ているものであるから、善い事のみを育て、悪を抜く事は方針としてはよいが、事実としてみれば、悪を除く事は同一の根を持つ全をも損なわねばならぬ。

此処で考えれば、悪には無頓着にしてどうかして善だけを育てる方法を考えたい。その場合、悪は見向きもせず、善のみを育てる光線が欲しい。

即ち伸びようとする善に共鳴を与えて、全の力で悪を殺してしまう様するのである。

人間の良い心持ちに、沢山共鳴してくれる先生と共に暮らす子供には、善が良く育つのである。

これ、共鳴原則の方法上の必要である。

この意味では、性質の善悪等を取り扱ったから、いわば訓育である。訓育上にはかりでなく、子供の生活能力を助けて行くにも大切なのである。

生活動力 Motivation 教育学の通語である。動機を動詞にして名詞にしたもの。

動機づけるはたらき、動機づけ等の意。

モーション（動勢）をかける事は外面から見たもので、外からの力づけである。

その内面よりの力づけを、生活動力と云う。

人の生活活動の自発的なものは、その活動の起こる何等かの動機がなければなされない。

動機はあっても、それがどうしても出て来ない事がある。

動機をすぐに実行に移す力の強い人と弱い人とがある。

まめな人はよく実行する。動機を動力として出して来れる何等かの力がなければならぬ。これ、生活動力である。

子供には動機があっても、何しろ力の弱い子であるから滑らかに出す事は出来ない。それで、そばから盛んにけしかけてやる事が必要なのである。

その中に、けなしてゆくやり方と、おだてるやり方とある。おだてる方法は真実ではない。又、も一つ後の報酬で吊ってゆく方法がある。

この方法は人間の弱点を突いた方法だが、おだてるのに比べると、この方がうそをしていないのだから無邪気である。

併しこれは、その結果にばかり魅力があつて、そのものには興味をもっていないのだから、真実の意味でのモティベーションではない。

これには、どうしても子供のかすかなれども存する、生活動力に共鳴していく。

例えば、子供が草をお菓子のつもりで持って来た場合、こちらは、それを菓子と見なして食べるところまでする。即ち、向こうを働き出させる為に、こちらから向こうへ入って行ってやるのである。臆病な子供には、この

方法を用いる。

今までの、間接、相互の原則は、保母が子供全体をマネーजीしているのであって、姿は見えず直接に触れていないが、共鳴の原則は、保母が直接に子供になすべきもののなのである。

併し相互は、互いに共鳴し得るからこそ相互が出来るのである。相互原則の根本の意味の中には、共鳴が含まれているのである。

特に共鳴原則を持ちだしたのは、保母の心掛けとして出して来たのである。

共鳴は、如何にして良くなされるかと云う事実問題を考える。

先ず、遂に共鳴をせずに過ごしてしまう様な原因をつきとめて除く事である。それ等の妨害となるものは、教育しようとする気持ちがあるからである。

この心は、保母の大切な事ではあるが、共鳴の妨げとなるのである。この様に除くに困るものでなくて、何らかの妨げとなるものがあるのなら、それを除くのであ

る。それが何であるかは各保母が己れを顧み、且つその場合場合で考えなければならぬ。

子供の気持ちに機敏でなければならぬ。その度が過ぎて、先の先まで考え勝ちなもの、あまり良い事でない。

又、全般でなくして、ある問題のみには共鳴できない。或る非常に健康な人は、病人に共鳴出来ない。余り共鳴しようと考えると、却って出来ないものであるのである。

斯様にいろいろと、その場合場合にに応じて考えるべき事が多々ある。

しようと考えて、却って共鳴出来ないという事を考えてみる。

共鳴しようと思っている事によって、子供の心に触れていく事が疎かになってしまふ。共鳴は子供の心に解け合っているからこそ出来るのである。

結論は、子供を可愛がる事がなければならぬ。子供が好きでなければならぬ。

親が子に対してする様な共鳴でなければ――

愛すればこそ共鳴出来るのである。

子供の前に行ったら、自分と云う考えを捨ててしまふ。捨ててから子供に接しようとすれば、無理な事である。なにしろ子供に対して、可愛さを感じれば良い。そして子供に接して、子供を自分の心の中に入れてしまふ。そうすれば、初めて良き共鳴が出来るのである。

第四原則

◎ 生活に依る誘導の原則

誘導と云う語は、保育上重要なもの

生活計画に依る誘導を、この幼稚園ではやっているが、原則としてみた場合に

“先生自身が先へ生活する事によって、子供を誘導する意”

先生の位置・立場を見たもの。

これを原則として出した理由。

普通教育とは、先生が仕事を子供に課して先ずやらし
て見て、それに訂正を加え、且つ指導してゆくものである。

先生は手工はしない。先生はさせる事と見てやる事よりしない。

之に対し、先生が先ず、乃至一緒に仕事をしてゆく事にあるのが誘導である。

身をもつて指導してゆくと云えるものである。先生が自ら仕事をしているという事は、様々の形で現れている。

例えば、幼児が幼稚園へ来てみると、先ず見るものは、先生が何しろ何かしている様である。何か先に仕事をしているのである。

之、原則と合致した生活である。

原則として考えた時、先生が「子供に何かしなさい」と云う代わりに、先生がしているのである。

そうすると、子供は先生が実際に生活している、そのにじみ出る力に依って、子供もそれをしたくなるのである。

幼稚園に於いては、この骨が大切である。

先生は幼稚園に於いては、何かの仕事が好きでなくて

はならぬ。楽しくやれる何かを持っていなければならぬ。

自分の生活として楽しめるものを、しているが良い。

子供の為として、高き、又は作るのは生活でない。自分の魂を打ち込んでやっている、その後姿は子供を引き付けるのである。が、併し、幼稚園の子供と何等かの関係を持つものでなければならぬ。

が、も一つ、子供と供にする事も大変良い。

相互の中に先生も入って一緒にして、その生活に依って誘導するのである。

普通の教育は、仕事を課して教育者は後から批判するのであったが、誘導原則に於いては、先にするのである。

——以下 次号——

(川村学園短期大学)

子どもと
(11)

冬と春のはざまに

清水 光子

お正月の賑やかさ、あかるき気分が尾を引きながら、そして大寒という一年中で一番気温の低いとされている十数日を経て二月、早くも、立春になる。けれど、日本列島大部分の地ではまだこれからが寒くなり、雪が多くなり風も冷たい。でも、さすがに日の光は輝きを増し日足も長くなっているのがわかる。ヴィバルディのヴァイオリン組曲「四季」の「冬」のあの泌みいるようなメロディには、それがよく表現されているように思う。

冬日柔か 冬木柔か 何れぞや

高浜虚子

俗に二、八月は風の強い荒々しい月といわれている。二月の風は凜である。倉橋惣三先生は「園丁雑感」の「寒風」で「どこまでつめたい風なのであろうか。そのゆく所、触

るる所、もの皆荒み破られぬはない。つれなやただ一ひら残る梢の枯葉をだに吹き払い、振り落さ^{おと}ではやまぬという。」とかかれ、更に「省みればわが心にもこの寒風はあるまいか。」と。なお「その目、その唇、風の様に人を貫き、裂き、責め、傷つ、くることはあるまいか。」と言われている。「罫に荒された野は、また来ん春の回復もある。一たび心の寒風に荒んだ心は、また回復のよすがもない。」とも。

二月は小の月の中でも日数の少ない月、それに、すぐそこに卒園、進級、進学の春が迫って来ている。親も教師も何となくあせり、いらだちを覚える。それだから短い二月を「逃げる」などという人もあるのだろう。敏感な子ども心はそれを切実に感じ取るのではないだろうか。卒業製作の粘土（焼物）がA君、Mちゃんがまだ出来ていない。「作ろうね」と誘っても乗ってきてくれない。記念アルバムにとじ込む絵がT君、S君はまだだ。三月の雛祭りをかねたお遊戯会にする劇、同学年の○組ではせつせと練習しているというのに……。うちの組はまだ全然やっていない……。などと、屈託していた或る日、ふいにO君が庭で呼ぶ、出てみると、すっきり晴れ渡った空に細い飛行機雲がずーっと線を引いている。先端に小さい点のように光っている。それが遂に視野から外れるまで見入っていたO君が、「ねえ」と話しはじめたのはもう六か月前の夏休みのことであった。

今週中に済ませたいあれこれを考えていた私はショックを受け、O君に頭を下げてお礼を言いたい気持ちであった。

四角な冬空 万葉集には なき冬空

加藤楸邨

霞まない冬空は清冽な碧さである。そんなある日、園庭に立って何気なく我影をみていて、ふと青空をみ上げたら、そこに白く我影が残像でみえるではないか。ちょうど外靴にはきかえている三人の子達に声をかけ、教えてみた。「うん、みえたよ、おぼけが！」私が手を上げたり、横に拡げたりして影を作るのをまねしていたが、砂場用のシャベルをもって影にしたりして一しきり遊んだ。何故白くみえるの？ ときかなかったのは年中さんだったせいかしら。と思いいながら、何とばかげたことをして楽しんでいたものよ、とおかしくもなった。

風の吹かない晴れの翌朝、ひどく冷え込んで、屋根にも、常緑闊葉樹の葉にも霜がまっ白におりて、池の水は厚く張って、少々たたいた位では破れないで子ども達の恰好な遊び材料になる。午前中一杯氷で遊ぶ。

「育ての心」の「霜柱」にある情景とそっくりに「可愛い両手を重ねた中に……」霜柱が、一人のは半溶け、一人の掌は泥によごれている。紙に包んでそとと持ってきた霜柱を玄関で迎えていた私に「あげる。」と手渡してくれたUちゃんは今年は短大の二年生である。その霜柱も「心無の霜柱よ」と倉橋先生を嘆かせた有さまだったが。更に霜柱が立つような園庭をもつ園が現今どこにあるだろうかと思うだに悲しい。

氷は、池がなくても作れるので、氷遊びは意図的に楽しめる。でも理屈っぽくなった

り、決して科学教育などと考えないで欲しい。三歳児組のT君、「ぼくの氷、お家を持って帰る」と、ビニール袋に入れて自分のロッカーに入れておいた。帰り際にみると、ただの水になってしまっていて「ぼくの氷、なくなっちゃった!」と怒っている。「溶けて、お水になったのよ」と言いかけて、溶けると言う言葉が事実として理解できるかどうか、言葉としてだけの納得ではどうなのか、と若い保育者は悩んだ。「ほら、私のも、さっきお皿に入れて白砂のおさとうにかけておいたの、これよ。」と砂水をみせる。T君の怒りは保育者のにこりで氷解したようで、ニコツとしたのをそばでみてうれしくなった私。

手で顔を撫つれば鼻の冷たさよ

高浜虚子

午後から妙に底冷えがしたと思ったら夜半から雪になったらしく、朝、一面の銀世界で、猶粉雪がしきりに降っている。胸弾ませて登園する。雪国では喜ぶどころではないだろうに、と思いつつも、である。

天地の息合いて激し雪降らす

野沢節子

初雪を誉めぬ息子が物に成

武玉川

この逆説的なのも面白い。兎に角、東日本の雪の朝は、子ども達はすてきな贈り物を貰ったのである。

ほほをまっ赤にして雪で遊ぶ。さんざん遊んで、入ってきた室の何というぬくもり！隅で、靴下や手袋を干したり代えたりしながら、聞く昔話。大人と子どもの心が一つに溶けあったような時、このような時が若しもないなら、何とかしてつくりたいと思う。

「先生、ぼく、風邪ひいてるからお母さんが外へ出てはだめっていったの。」と、K君はみんなで門から入口までの雪かきをみている。少し不安そうに、しょんぼりと。「そうお、だったらみてね。若し、やりたくなったら来てもいいよ。」と応じつつ、何かを訴えようとしているかにみえる瞳をいとおしく思う。昔から、雪の朝は「裸虫の洗たく」とさえいうではないか……。

あとずさり　するのみなりし　幼子の　この朝をふと　前にはい出づ　来嶋靖生

冷たい風が一日中吹いたり、雪空が重くたれこめたり、そうかと思うと和やかに日射しが暖かかったりを繰り返しながら、日足が長くなっていく二月、自然は物も言わずに春へ向かって進んでいるのを、自然に一ばん近い幼児（これはおかしい方であるけれど）はいち早く感じるようである。球根の芽がおずおずと出かかっているのを見付けたW子ちゃん、驚いて「出てるよ！」と知らせてくれる。

でも大人は、気になることがここへ来て一杯ある。小学校入学が近いのに、年長組の子、この子、大丈夫かしら？ もっと大らかに彼等ひとりひとりの成長エネルギーの昂まりを信じようと思いいながらも気になるこの頃である。そんな一人のY君、時々遠くをみているような瞳、元気ではあるが何か今一つ気になっていた。それが二月も半ばになって、猛然と創り始めた。卒業記念の粘土（焼きもの）では、恐竜のような、怪物のような像とも見えるものを時間をかけて作った。「これ何かしら？」とききたいのをぐっと抑えたことだった。そのY君がある日、朝からあき箱のコーナーでさまざまな箱を選んでいた揚句、クッキーが入っていたらしい細長いのと茶色の長細いの二つとをセロテープで着け、上の箱の間に割箸を入れ、それが上下に動くようになっていたのを作ったので、それを見ていた私は「できたのね」と声をかけた。彼はうなずき、その割箸をしきりに動かして、私に「これあげる。」と渡してくれたのだ。「あら、ありがとう。うれしいわ。」と受け取って、今、彼がやっていた様に割箸を動かしてみたものの、はて？ 彼は何をイメージしたのか、とんと私の貧しい想像力ではわからないのである。でも私を理解者と思っているらしいまなざしをみると、どうして今更、「これ何なの。」と言えるだろうか。悩んだ。そして思い切って、「ここにお窓あけたら、外がよく見えるかしらね。」と言った。すると、何と、彼は「あっ、そうだ。」と私の手から取り戻して、二つの窓を切りあけて再び私に手渡してくれた。またしても目の潤んでくるのに堪えながら「ありがとうね、おうちへ持って帰るわ、いい？」ときく。「うん、いいよ。」とにっこりした顔に、又

夕胸を熱くしたのだった。

二十四節季の二月の雨水ともなると、春の近づく足音がきこえそうな日もある。いよいよ大人達は学年末、新年度などと気忙しく、それに厚い靴下がぬげずにいるのに、砂場に入水を入れてはだしになったりする。春へ向かつてのエネルギーは始動しているのだ。草の芽、ふきのとうは頭を出し、樗の幹の肌がつやを帯びてくる。「自然に一致することもの栄誉」とのスタンレー・ホールのことばではないが、生命の躍動を感じとって外へ、外へと心もからだも向いている子ども達に、大人の恩きせがましい、お為ごかしの言葉やふるまいを決してすまい、と思う。



ほんとうのことなら

多くの言葉はいらない

野の草が風にゆられるように

小さなしぐさにも

輝きがある

ひとつの花のために

いくつの葉が

冬を越したのだから

冬の風に磨かれた

椿の葉が輝いている

母のように輝いている

星野富弘

春に向かつてはばたこうとしている子ども達を、ただ見守っただけでよいのだろうか！
なかで力弱い子どもに何をしてあげればよいのか、迷ったり、悩んだり、喜んだり、で
も、秘やかな楽しみもある子どもとの二月である。

(音羽幼稚園)

「思いかた」の練習

豊田 一秀

ひとりの子どもが困った顔をして私の所にやってきました。どうしても思うように絵が描けないと言います。

「ぼくは、さっきからパイプ（喫煙用の）の絵をかこうとしているんだけど、途中からどうしてもだめなんだ」とその子。見ていると横に線を引いてゆき「ここまではいいんだけど、曲がるところからどうしてもかけなくなっちゃうんだよ」と言いながら、ペンを紙から垂直に空間上に持ち上げています。パイプの首は確かに上に向いています。その子もそのように描こうと思うのですが、そうするとペン先はどうしても空中に上がってしま

い、紙から離れてしまうのです。このほは笑ましい光景の中で、この子は自分の思い方が間違っているという事実直に直面しています。

子どもをよく観ていると、思いかたの練習は、もつと、ずっと幼い時から始まっている事に気がきます。たとえば、赤ちゃんはベビーチェアーからくり返し、くり返しスプーンを落としては遊んでいます。赤ちゃんは、手離せばスプーンが手の中から下に落ちて行く事を発見したのです。そしてスプーンを下に落とそうと思うの、なら、手を開けばよいという道理を楽しみ、確かめているのです。このように、物を思い通りにあやつれるという認識の中から、幼ない人たちも自分の意志の存在と自己有用感の第一歩を得ているのだと思います。

この場合、正しく思うとは、自然界の法則を知る事を意味します。水たまりに葉っぱを浮かべて子どもが遊んでいます。でも、もしも石ころを浮かべようと思っても、決して思い通りにはならなかったでしょう。ざるで水をくもうと思っても、それは無理なのです。自然は時

をかえ、品をかえ、子どもたちに正しく思うことを教えてくれています。自然は子どもに対して少しもゆずってはいけません。どんなに泣いて怒っても、下に落ちてしまったスプーンはテーブルに戻って来てはくれませんし、石は水に浮いてはくれないのです。そのかわり、子どもがひと度思いかたをかえ、法則を見出せば、自然はたちどころに子どものもので思い通りに応えてくれる存在へとその姿を変えます。

さて、自然や物に比べて、人間（友だち）はなんと思いかたの難しい対象でしょう。遊ぼうと思って、いつもお父さんになっているようにちょっとつついただけなのに、泣いてしまう友だちもいれば、本気で怒ってしまう友だちもいるのです。石や葉っぱは、どれだけポケットにつめ込んでもおとなしく納まってくれますが、友だちはそうはいきません。砂場はいつも自分を待つ存在であって、砂場の方から自分に迫っては来ませんが、友だちは思いに反して向うからやって来る時があります。積木はつむのも、こわすのも思いのままですが、友だち

は自分に指図しようとするのです。友だちは、思い通りにはなりません。もしも友だちを思い通りにしたいのなら、どうしても自分の思いかたの方を修正したり、また自分の思いかたを相手に分かるように伝えなくてはならないのです。

自然界や物質について正しく思うという事は、それらの法則や道理を正しく理解する——子どもの場合、身体で会得する——事でした。一方で、人間（友だち）に対して正しく思うということは、どういうことなのでしょう。それは、相手の立場に立って考える事ができるということではないのかと私は考えます。そして、子どもがそう考えられるようになるためには、前提として、どうしても子ども自身が「自分は受け入れられ、尊重されている」と思えるような、大人のささえが必要なのです。それは家庭では両親の、そして幼稚園では教師の役割です。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

やまだ ようこ著

『ことばの前のことば』
ことばが生まれるすじみち1

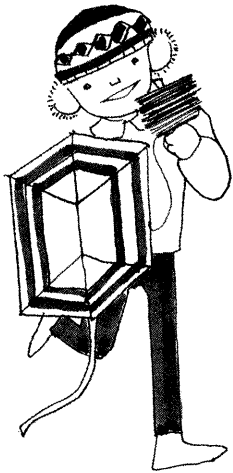
(新曜社 一九八七年)

森下 みさ子

赤ん坊と母親の間には「我」も「汝」もない。二人が共存する心理的場所に風はおこり、共有する「今、ここ」の空気をふるわせて、互いに響き共鳴する活動が生じる。人はその生を、人と共に「うたう」心地良さから開始するのだ。これは、根源的な愛の形である。にもかかわらず、子どもはそこに安住しない。その快楽を捨ててまで、物の世界を認識する活動に積極的にのりだしてゆく。ただし見落としてならないの

は、そうして新地に向かう好奇心の原動力は、根源の愛に支えられているということだ。そしてまた、獲得された物の世界の認識も、人との「うたう」関係をより複雑に多彩に生きてゆくために用いられるということである。ここに、決して階段状の蓄積物では描けない「発達」の真の姿、すなわち失うものと得るもの、無駄と獲得が、相即的に作用する場が開けてくる。著者は、その根茎^{リゾーム}状の広がりの中から「ことば」をすくいだしてくるのだ。子どもと共に居る母である観察者の指先によって……。だから、この本は充分に知的であるばかりか、美しく優しい力を秘めている。それは、発達のあらゆる面を見つめ、それを見守りつつも言述してゆくことの悦びと痛みを知っているためである。

(お茶の水女子大学)



幼児の社会性に関する一考察(2)

「遊びに加わる」 ことについて

上 垣 内 伸 子

前回は、子ども同志の『出会い』が、相手を受け入れること、触れ合うこと、行動を真似することなどによって発展していった事例を紹介した。しかしながら、なかなか遊びの輪に入っていけなかったり、人との関係を持ちにくいこともある。『友達と遊べない』『仲間にはいっていけない』ことを困ったことと感じて悩むこともある。

この『友達と遊べない』というのはどういう状態なのだろうか。本当に遊べていないのだろうか。今回は、なかなか友達と遊べないといわれている子どもの集団参加の様子を手掛かりに、『遊びに加わる』ことについて考えてみることにする。

(1) 見つける

△事例1▽

Y子は三歳近くになるがお母さんからなかなか離れら

れない。同じくらいの子どもたちと遊ぶ機会を持とうと、母と二人で5月から月一回の『遊びの会』に参加している。この日の活動が9回目の参加である。

今回の遊びのテーマは「汽車ごっこ」。親子で段ボールに思い思いの飾りを付けたりして汽車作り。Y子親子も紙テープや色紙で制作を楽しんでいる様子だ。そのうち『段ボール汽車ぼっぼ』に入って引っ張ってもらったり、抱えて走ったり、狭い中に二人で縮こまって入って笑いあったりとにぎやかな活動が展開し始めた。

Y子も汽車に入って押してもらったり、他の子どもも汽車とぶつけて喜んだりしていたが、そこへもう一人の子どもが来てY子の汽車に乗り込んだ。厭がったY子は汽車から出ようと母がしがが立ち上がれず、母を求めて手を伸ばして泣き始めた。母に抱かれてからも激しく泣き続け、その後『段ボール汽車ぼっぼ』には乗らず抱かれのまま他の子どもの動きを見ていた。

次にロープで作った汽車が登場し、子どもたちと保育者が次々乗り込んで走り始めた。みるみる長くなった汽

車はよろよろしながら進んで行く。母親達はトンネルになったり踏み切りになったりそれぞれ役割を取りながら、過ぎていく子どもたちに手を振っている。Y子の母も初めはY子を汽車に乗せようとしたがしがみついて離れないので、保育者と三人で駅を作ることにした。母が黒板に駅を描き始めると抱かれているY子も落ち着いてきて、「チュールリップを描いて」などと頼んだりしている。母は線路ぎわにチュールリップを咲かせたり、上手にY子の注文も受け入れながら駅を描いた。黒板の前に机を置いてプラットホームを作るとすっかり駅らしくなり、降りる子どもやまた乗る子どもでY子の周囲は賑やかになってきた。Y子は母に抱かれたままだが、なんとなく面白そうに他の子どもの乗り降りの様子を見ている。興味を引かれている様子はあるのだが、母親や保育者が「乗ってみる?」「おいでー。」「一緒に乗ろうよ。」などと誘うとまたまたしがみついてしまう。

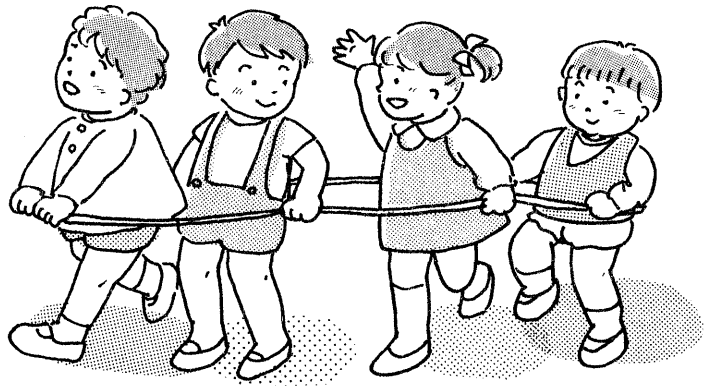
Y子を駅に残したまま汽車は着いては出発することを繰り返した。何度目かに到着した時、保育者が「りー

ーん！まもなく発車します。急いでお乗りください。りいーん！」とアナウンスした。駅で待っていた子どもたちが大急ぎでみんな乗り込んでY子一人になった。汽車に乗った子どもたちや保育者は、「早く早く！」「汽車が出ちゃうよー。」と手招きしながらY子を呼んでいる。すると、Y子はさっと母から降りるとするりとロープの中に入った。

「しゅっぱーっ！」子どもたちが全員乗り込んだ汽車はゆっくりと走り始めた。Y子とは見ると、先ほどまでとはうって変わった明かるい表情で走っている。「バイバイ」という母親達の声にも他の子どもと一緒に手を振って応じている。それから子どもたちと保育者を乗せた汽車は何周も何周も回り続け、歌を歌ったり言葉にならない歓声をあげたりと、楽しい気持ちもぐるぐると渦を巻いているかのようだ。Y子も顔を上に向け体をのけ反らせて笑っている。母親の前に来るとはにかんだように笑ってみせる時もある。

その日は、それから帰る時まで機嫌よく、母親から離

れて遊ぶことができた。



△事例2▽

E子は三歳になるが、ことはがでない、働きかけや指

示が通りにくいという子どもである。知らない場所へ行ったり気にいらなことがあったりと大声で泣くことがあり、母親はE子づれの外出に苦勞している。遊びを通じて人との関係を発展させたいと考えて、Y子と同じ「遊びの会」に参加している。

1回目の参加時は、建物に入ったときから泣いていて、子どもが集まっている中に入ると一層激しく泣いて母親に抱きついている。母親は、「やっぱり。いつもこうなんです。」といって困惑しながらもE子を抱いて他の子どもの遊ぶ様子を見ていた。昼食の時間にもE子は母親の背中にくっついたままおにぎりを食べていたが、背中越しにまわりの様子をみつめていた。

2回めは、部屋に入ってから泣かずにニコニコしていた。「今日は不思議なくらい機嫌がいい。」と母親も嬉しそうに言う。E子の表情は和らかな笑顔であるがその目はどこを見ているのか定まらない。視線が宙を漂っているかのように。そして、次々と遊びが展開していく部屋のをぐるぐると走りまわっていた。2回目以

降、この遊んでいる集団のまわりをぐるぐる走ることがしばらく続く。「遊びの会」にはこれまでも多動傾向のある子どもの参加があり、周囲の動きにとらわれず勢いよく走りまわる姿は見慣れたものだったが、それらとE子の動きはどこか異なっていた。多動傾向のある子どもの多くが直線的に力強く動くのに対し、E子のステップは軽やかで、足よりも視線も表情もフワフワとした浮遊感がある。保育者にとっては、その目的でない動きはとらえどころがなかったが、なんとなく楽しんでいるんだなという感じだけは伝わってきた。

何回かの参加の中で、次第にE子の走りに変化がみえてきた。初めは進行方向を向いて走っていたのが、遊び集団の方を見ながらの走り——つまり円の中を向いてツーステップで横向きに走るようになってきたのである。フワフワした笑顔はそのままだが、視線は宙を漂っていたのが、円の中心つまり遊び集団をみつめるものに変わっていった。その後もE子は他児の動きをみつめながらグルグルとそのまわりを回り続けたが、7回めの参加の

時、その円運動がくずれた。その日の遊びのテーマは、「新聞紙で遊ぼう」というもので、それぞれの親子が、新聞紙をビリビリ破いたりちぎったり丸めてボールにしたり、紙ふぶきをかけあったりした。大量にできた切れ端を大きなダンボールを集めると、テーブルの上からその中にジャンプすることが始まった。押しあいへしあいのしながら母親や保育者のかけ声で次々とジャンプが続く。自然にテーブルと飛びこむダンボールを中心とした動きの流れができあがった。E子は、初めはそれまでと同じように、他児のジャンプを見ながら周りを走っていたが、その足どりのままジャンプの流れの中に入っていた。一度飛んではまたしばらく周りを回るというものだったが、とぎれとぎれに他児の中に混じって遊び、その後、母親や保育者から紙ふぶきをかけられることを繰り返した。

「友だちと遊ぶ」とか「集団での遊び」といったことを具体化して思い浮かべる時、それぞれが一つのテ

マに即して動く姿、何となく一まとまりになって遊ぶ情景をイメージすることが多い。「友だちと遊べない」という悩みを持っている母親は、自分の子どもがそうした集団の動きからはずれていることに問題を感じているようだ。けれど、果たして、遊びに直接加わることだけが「集団参加」と呼ばれるもののだろうか。

Y子もE子も、原因は異なるが、いわゆる「友だちと遊べない子」である。Y子はなかなか母親から離れられず、他児の誘いかけに対しても拒否的でひきこもりがちだった。初めの頃、母親はうかない顔で、ベソをかくY子を抱くことが続いた。E子も、初めての場所に慣れないうちは泣くことが多かった。これらの行動は、拒否という形をとった集団への参加とはとれないだろうか。集団の存在が二人の心の中に明確にあるが故の拒否である。そして泣くことで拒否するという行動の後、「見つめる」ことが始まった。Y子は母に抱かれて、E子は集団の周囲を回りながら、他児の動きをとらえて見つめるという行為によって、遊びに参加していったように思

う。二人の「見つめる」行為の中には、拒否ではなく集団を受け入れようとする心があったのではないだろうか。拒否から受容への変化があったからこそ、一つのきっかけから遊びの動きの中へと入っていったように感じられた。

(2) 動きの共鳴

△事例3▽

S子は二歳すぎの女児である。表情が乏しく、人からの誘いかけに応じることも少ない。同じく月一回の「遊びの会」のメンバーで、父母と三人で参加している。

「遊びの会」では、フィンガーペインティングや小麦粉粘土といった手が汚れる遊びや、ゆさぶりなどの動きの激しい遊びをすることが多いが、いずれもS子は苦手のようだ。

5回めは公園で砂遊び。はだしになって砂場に入るのは初めてのS子と両親は不安気な表情だ。型抜きなどして遊んでいたが、水が運ばれて池が作られ、数人の子ど



カット・佐藤 和代

もが泥の池に入って遊び始めると、母親は泥のかからない隅の方へS子を連れて行き、「すごいわねえ。S子あんなこととてもできないわね。」と驚いた様子で見ていた。

大きな山と山の間に掘った池にトンネルから水が流れこむ度に、中に入った子ども達は、おし戻したり土手をくずしたり水をくみ出したりと大騒ぎをしている。S子は母親にしがみついてその様子を見ていたが、そのうち足をムズムズ動かして砂にもぐらせ始めた。何度も抜いたりもぐらせたり砂を蹴ったり——手はしっかりと母親にしがみついたまま足だけ動かしながら池の様子を見ている。保育者が砂でS子の足を覆うとにっこり笑った。

S子にとっても母親にとっても、砂は興味をひかれる素材というよりも、汚れるという負のイメージを持つものであった。初めは手や足に砂がつくことをとても嫌がっていた。しかし、池で楽しそうに遊ぶ他児の姿を見た時、S子の中で少しずつ気持ちに変化していったようだ。「すごいわね」といいながらも拒否的な母親にしがみついて同調する一方、心の片すみに面白そうという気持ちで芽生えたのか足だけは砂の中で動き始めた。池の中の子どもの楽しさにS子の心が共鳴し、池の中の動き

にS子の足が遠慮がちに応じているかのようだ。たとえば池の中に入っていないなくても、S子は泥の池の遊びを楽しんだに違いない。

「遊びに加わる」ということは、直接集団の中に入って活動することのみを表わしているのではないだろう。Y子やE子やS子のように、遊び集団を拒否したり、見つめることで自分の中にとり入れたり、距離を置いて動いてみることも「参加」の一つの形であるように思う。直接参加の前のウォーミング・アップともとれるこうした行動をゆっくりと育てていきたいものである。

(お茶の水女子大学)

南の島の子どもたち(6)

ユタ的なこと

沖縄では、衰えつつあるとはいえ、今でも庶民の暮らしの中にユタ（民間巫女）が位置づいている。特に精神障害が生じた場合、障害者の家族の約8割が、患者を病院に連れて来るまでには、ユタを経て来ると言う。靈感を求めすぎて精神障害に陥る場合もある。

主婦達と夜、ひざを突き合せての対話の中にも、新年になると、運勢をみてもらいにユタを訪ねているという事を聞かされてびっくりすることもある。まさに「男の女郎買いと女のユタ買いととは癒らない」（沖縄の諺）らしい。あるいは、死者の一周忌には、ユタを招き、ユタの口を通して、死者の思いを聞くのも慣習である。子ども

ものことで心配があるとユタのところに相談に行くことは勿論である。

私自身も、沖縄の宮古島で生まれ育ったので、ユタとは関係なく暮らしてはいてもユタ的なことは体にしみついているのではないかと思う。又、母がユタと共に生きた世代であったこと、ユタに頼りつつ、日々の暮らしに祈りを持って私たち兄弟姉妹を育ててくれたことが、今では大切な思い出となっている。ユタ問題は、沖縄の文化を考える場合、避けて通れない課題なのだろうと思う。

最終回である今回は、私の体験をも交えて、ユタ的な

浅野 恵美子

この意味と課題について考えてみたいと思う。

タマシイが落ちた

私の母は、その世代の多くの母親がそうであったように、家族が病気になったり、うまく事が運ばない場合等に、ユタ（宮古ではカンカカリヤと呼ぶ）をししばし買っていた。私が小学低学年の頃、私は病弱な子であったが、体がだるくなつて元気を無くしていた。母はユタの家に相談に行き、「あなたの娘は、何かにびっくりして魂を落している」と言われた。そこで、母はさっそく、その道の専門のユタ（おばあさん）を招きウグワン（御

願、拝み）をしてくれた。

そのおばあさんは、我が家の何か所かで、線香を燃やして、方言でのたくさんの心を込めての祈り言葉を唱えた。言葉に心を込めていたのが印象的である。おばあさんが、家の入り口で祈っている時、母が私を呼んだ。私が近づくと、母は、玄関先の道路の小石を拾い、用意してあった私の服にくるんで私に渡した。私は、何も考えることなくそれを受け取っただけである。ところが、大変不思議なことに、その日を境に、私は元気になったのであった。

この出来事は私にとって驚きであったが、沖縄では珍



しいことではなかったようだ。びっくりしてタマシイを落とすとのユタのお告げもしばしばなされるお告げであり珍しいことでもなかったのだ。

友人のKさんも私と似た体験の持主である。別の島で育った彼女の場合、やはり、元気をなくしている時、親戚の霊感のある人物が、誰かがタマシイを落していると感じて、誰か元氣のない者はいないかと捜しに来たそうである。そして、Kさんをみつ、ウグワンをしてくれたというのである。Kさんの場合、茶碗に水を入れ、その中に石を三個入れ、その水にその人の手を浸けて、Kさんのこめかみにつけてくれたようだ。そして、Kさんもすっかり元氣になったそうである。

母は、私が木のぼり遊びをしていて木から落ちた時にも、落ちた場所まで出掛けて、今度は専門のユタに頼むことなく、自分で線香を焚いてウグワンをしてくれた。そして、やはり石を拾ってくれたのだった。

私は、ユタ買いに行ったことはないし、その場面を見たこともないが、幼い私にとって、母が私の為にユタを

買っていることを知ることは、快いものであった。何かの大きい力から見守られているという安心感にも通じていた。自分が特別な意味のある存在であるという思いも育てたと思う。私の為の特別なウグワンは、側で見ているだけであつたとはいえ、幼い心に響き、その気にさせたのではないかと思う。幼い心が暗示されやすい性質を持っていた為でもあるだろう。しかし、大人の場合でも同じようなことで良くなったという報告がある。

石はタマシイ?…神?

「花を知るには花になれ」とは禅の教えである。対象を深くみつめ、対象に没入できた時に対象が理解されてくるということであろうか。それができるのが子どもたちである。彼らは、遊びでいきいきと花を演じることができる。花にも心があると信じ、花のイメージの世界に飛び込み、花になりきってしまう。

ユタもそのような心を持っているのだろうか。実際、草や木の言葉が聞けるといふユタ的人物がいる。

そんなことと関係させて研究した訳ではないが、私は空想で花になったり、木になったり、石になったりすると人間の心にどんなイメージが生じるのか研究したことがある。

目をつぶり、自分で好きな花や木の石のイメージをえがき、それに応じるようにして体を使い、じつと三分間空想するというやり方である。たくさんの方々に体験してもらったそのイメージには個別差異的なバラエティがあったが、一般共通性として、花がやさしさ、木がさすがしさ、石が強さや不変を引き出した。

特に石を演ずると、体はかたくなり、心が強くなり、同時に頑固、孤独になるが、神のような気になるというイメージにまで繋がったのである。どうして、タマシイが落ちた時に花ではなく石を拾うのか。それは、この石の心（イメージ）にあったのではないか。ユタ的なふるまいには、人間の共通のイメージが活用されているのである。私にとって驚きであるのは、沖縄では石を神々のシンボル視する風があるということである。

又、夢分析では、石は「内面的な世界の不毛さ」を現す象徴言語だという。それは、石のマイナス面である頑固、孤独の一面的な説明であるように思われる。

ユタの功罪

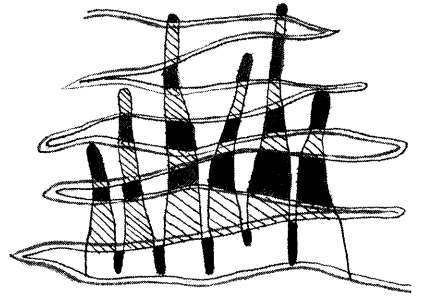
ユタは、古代的、無意識的な智慧を活用している部分があることは、否めないだろうと思うが、ユタ問題は、根が深く必ずしも肯定できることはかりではない。その為、ユタの存在をどう受け止めるかをめぐっては賛成と反対があって揺れているのが現状であり、否定的な方に大方は傾いている。

沖縄のユタをめぐるなまなましい驚くべき実態については、友寄隆静著「なぜユタを信じるか―その実証的研究―」（月刊沖縄社一九八一年）に詳しい。彼は、たくさんユタと直接インタビューしている。又、ユタを買った人びとの体験記、ユタ肯定の意見、否定の意見、ユタについての意識調査等広く紹介している。

この報告を読むと、ユタの持つ超能力というものが実

在することは否定できない。しかし、靈感があるから即その人が幸福になれるとはかぎらない。

「彼（ユタ）は何はともあれ、情け深い人のように思われた。額にきざみこまれたシワの深さは、苦悩の深さと共に、情け深さに通ずるものと思われるほど印象深いものであった。生活史の側面に目を転ずれば、夫や子どもと若い時に死別した者、子供ができなかったため離婚させられた者、未婚の母、頭痛や吐血の苦しみに悩んだ者、事業に失敗しノイローゼ気味となった者、など……（中略）……友は去り、慰めを与える人は絶え、希望が



失せた時、一木一草、路傍の石までが声なき声を放って近づいて来た。昼は病に悩まされ、夜は悪夢にうなされる彼らの内部に、白装束の女や、白髪 of 老人、侍等が現れるようになり、彼らは先祖の神と名のる霊に心身をゆだね、神の使いとしての使命を自覚する。しかし自らを振り返る時、喜びを伴い自発性を持つ仕事というよりは、一方的な先祖の神の強制に、やむなく従うという事実を認めないわけにはいかない。憂いの日々を歩んできた彼らが、強い記憶力に富み、ヒステリックな一面が強いことは了解できることである。いたずらに超能力にあ

こがれる人は、彼らの苦しみの深さを知らない人である。」と「ユタと対話して学んだこと」の中で友寄は述べている。

彼は又、思想や信仰がないことがユタの共通点だとも述べている。思想性のないユタが、低い霊のいいなりになって人々を指導する場合、ユタを買う人が混乱させられることがしばしば起きているという。信じられないことなのだが、ユタ買いで財産をつぶしたという例は、最近でもきこえてくるのである。

私の学生に、幽霊を見るというユタ的人物を恋人に持っている人がいた。友人たちは、その男が若くして彼女の他に女をつくるなど信用できない男であることを知っていた。何とか別れさせようとしたができないでいた。彼は、別れようとする彼女に自殺を言うと行って威し、実際に手首を切ったりする人物であった。こんなふうに靈感のある人物は必ず良い人ではないのである。

霊というものが存在するとしても、正しい霊であるかどうかが重要である。ましてや、特定の霊が、ある人の

人生を利用するということは、人権侵害ではないか。霊というものは、どういう考え方で人にとりつくのか。先著を読んでいると抗議したい気持ちにもなった。とりつく霊ととりつかれる人との関係が気になるのである。

ともあれ、ユタが存在することは庶民のニーズがあるからでもある。それならば、庶民もユタもより賢くなること、自らの宗教性、思想性を高めていくしかない。

ユタからの手紙

私は、ユタとは関係ない暮らしをしていると思っていたのだが、これを書いていると、ユタの方が私に関係してくれただけであったことが思い起こされてきた。

実は、私は、今から13年前に息子を亡くした。息子は、小児白血病となって、約10か月の闘病の末、三歳の誕生日を前に他界したのであった。初めての子で、生まれた時から育児記録をつけていたので、闘病中も記録は続いていた。その記録を活かし、お世話になった方々に香典返しをするという意味を含めて、「裕樹は生きてい

る―小児白血病の親と子の記録―」を夫と共に出版、配布したのであった。その記録は、多くの方々に読まれ励ましをいただき感謝であった。その記録が見知らぬユタの方の目に止まったのである。その方は、名前を告げず、ユタの立場から本の中にたくさんコメントを書き込み、郵送してきたのだった。私は、当時、そのコメントとともに会おう勇気がなく、読みはしたものの恐くて仏壇の奥深くに隠したままになっていたのである。

「表紙の裕樹君と向かい合っていると目頭があつくなり、最初の程は表紙を開くこともできずにおりましたが、勇気を出して拝見致して居りますと、私なりに何かお役に立てればと記録をおつてみえない世界の立場から筆を入れさせてもらいました。果して御参考になるかどうかわかりませんが、私自身、頭の先から足先までガンと宣告されましたが、おかげさまで現在はすくわれまして神の使命者（うちみき）として頑張っております故に慈愛の御目をもってごらん下さればしあわせに存じます。

神示によれば、世の中の不幸は、総て霊作用によるも

のだとおっしゃるのです。ですから、其の霊をなぐさめ成仏させてやれば、皆な幸福になるということです。成仏させるには、私共が此の世に生まれてこの方、お世話になった火風水神（みふしがなし）を全部、日神自身（まうがん）を中心に和合せ、それが自分自身や各家庭、各字や村、各国のまもり神になるということです。」

こんなふうにしてそのユタの方は、書き出している。たくさんコメントがあるのであるが、例えば、病院の近くを車で走っていて今度は間違いなく妊娠らしいと夫に報告して喜び合っているあたりに対しては、「こんな素晴らしいお話は自宅ですればよかった。病院に溜っている霊がうらやましがって奥さんのおなかに入ってきて、出産の苦しみを与えた」としている。あるいは、夫婦喧嘩のところでは、「白血病という形でゆうき君に霊がかかって成仏させてくれと頼んでいるのに御両親に靈感がないために気がつかないで、その霊がゆうき君から離れて一時的に夫婦喧嘩させたり、離婚問題に発展させたりしていた」というような内容である。

そのユタは、お祈りの仕方についてもたくさん書いてくれた。このユタの方が、見知らぬ私たちに自分なりの愛を向けて下さったことを私はありがたいと思う。他人のことを自分のことのように感じてくれる心がありがたい。この暖かさがユタの魅力なのである。

この事実を思うとユタ問題は、観念的に取り扱っても仕方ないと思う。少なくとも一人ひとりが幸せになるためにさまざまな試みがなされているということだ。そして、間違いもあるということであろう。

科学の発展、生活の近代化の中で、ユタの介入する子育ての慣習はなくなりつつある。しかし、古き良きもの、情は失いたくないものだ。

私たちが息子の闘病にあけてくれている頃、宮古の母はユタを買いに行ったそうである。ユタは、「あの二人は神さまを信じていない。神さまを信じないと大変なことになる。」と警告したそうだ。その警告に私は、ウチアタイ（内面に照らしてその通りと思うこと）した。日

々の暮らしに追われて、思想はあっても信仰をもたず、知に走って情を失いそうになる自分がいるからである。

育児、家庭の平和というものは、日々の祈りを欠いてはうまくいかないこともわかってきた。霊というものは見えはしないが、自他の心のよごれ（不浄な霊？）には良く気づくようになった。母が祈ってくれたように、私も私なりに祈って過ごすようになった。祈りは、正しい目標を与えてくれる。私は、未だ特定の宗教を持たないが祈りを信じる。人の心、思いは伝わり、広がるものだ。そして、心の浄化こそが平和を作り出すのではないか。

ユタには、たくさんの不安要素もつきまといっているが平和を願い、育てる方向で行動できるのであれば、彼らと仲間になれるのだと思う。

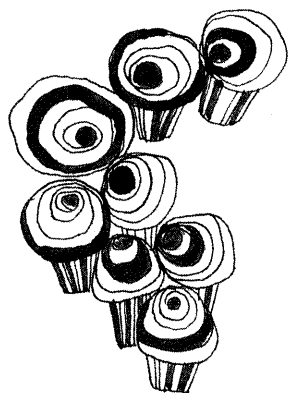
（沖縄キリスト教短期大学）

***** 若いお母さんたちへ*****

アトランタ便り

はるにれの会

入江 礼子



(サンダーस्टームの日)

その日、四月九日は、朝からバケツをひっくり返したようなドシャ降りと日本の梅雨明け前のような激しい雷鳴にみまわれていました。渡米後一週間が経ち、その日から、三人の子ども達はアメリカンスクールに通うことになったのです。朝七時十五分、といっても既にサマータイムになっていたので、実際の時間は六時十五分、日本では信じられない程の早朝に、私たちは学校へ向けて出発しました。

最初に、長女の行くハドルストンエレメンタリースクール(小四〜小六までの学校)へ行き、次に長男と次女の行くオークグローブエレメンタリースクール(幼稚園〜小三)に行きました。両校とも驚く程手続きが簡単ですぐに担任の先生が決まり、(我が家の場合、前もってアポイントメントを取っていなかったのですが、それでも)子ども達は三人共、満面に笑みをたたえた先生に支えられてそれぞれ教室に消えて行きました。私達夫婦が出来たことは、子どもについて面談の時を持って欲しい

という申し入れを、その短かい時間に済ませることだけでした。子ども達がなくなった後、私達はオフィスで帰りのスクールバスの番号と時間を確認させられ、初日も帰りはスクールバスで帰るので心配しないように言われました。

子ども達には日本で全く英語の準備をさせていなかったで、恐らく何もわからないはずで。そういう子ども達を先生方は、サッと受け取ってくださったわけです。私は、ただただあつけにとられてしまいました。

夫はそのまま出勤し、当時はまだ車が一台しかなかったで、私は家まで送ってもらってから、二時四十五分まで一人で家で過ごすこととなりました。

お昼近くになると、朝のサンダーストームが嘘のようにカラリと晴れ上がり、その暑さはほとんど夏の暑さでした。特に春の嵐は長時間続かず、一日のうちで大雨と晴天があるのはこの地では当り前なのです。

朝の学校でのことといい、お天気のことといい、随分違う風土なのだなあと思わずにはいらませんでした。

いよいよ午後二時四十五分。きっかりに家の前に黄色いスクールバスが止まりました。私は五分くらい前から今か今かと庭をウロウロしていたのです。まず長男が降りてニコッとし、続いて次女が降りてニコッとするとはいきや、突然大声でワーッと泣き出し、しばらくの間は私に抱きついて泣きじゃくり続けました。

「あーよかった。僕達家を間違えないで……。どこで降りるのか先生はバスの運転手さん（ほとんど女の人）に言ってくれたみたいなんですけど、僕本当に着くかどうか心配だったんだ。ズーっと外の景色をにらんでいたんだけど、なかなか知ってる景色にならないし……。でも、この間お散歩に行っておいてよかったよ。ラークスパー・ターン（我が家の区域）に入ったら近いなってわかったから……。あーよかった。」（長男 小三）

「ワーーン、ワーーン……」（次女）

家の中に入ってもしばらく泣き続けていた次女でしたが、やがて一言二言言葉を言うようになりました。

「どうして泣いちゃったの？」（私）

「だってーだってー、みんなアメリカ語なんだもん！アメリカ語しかしゃべってないんだもん。」（次女）

十五分すると長女も帰って来ました。

「うん、先生がやさしくてよかった。一番前の席に坐らせてもらえることになったから、ちょっぴり安心したの。」（長女 小五）

さあ、明日から大変！というのが、その日の偽らざる私の気持ちでした。そして、予想通り、いえ予想以上に精神的に苛酷な日々の火ぶたが切って落とされたのでした。

（ランチじゃなくて、お弁当にして！）

子ども達の学校では、お昼はランチルームでランチを食べることになっています。といっても日本の学校のように全員が給食でなければならないというのではなく、お弁当を持ってきたければそうしてもよいのです。学校のランチを食べる時だけ一回分として九十セント払えばよいというわけです。（ちなみに朝食が諸々の事情で食

べられなかった子には朝食（もちろんお金を払うのです）があります。私は、日本の習慣通り迷わずに学校のランチを子ども達に食べさせることに決めました。

そして次の日、帰りのスクールバスから降りた次女は、又思い出したように泣きはじめました。それでも、こころもち、昨日よりは泣く量が少なくなっていたのです。やがて落ち着いた彼女は、「エイマス先生からお手紙があるの。」といって、私に先生からのメモを出してきました。それによると、今日のランチメニューで、次女が食べたものはフルーツだけだったというのです。それはおかわりをしたらしいのですが、他のメニューには、一切、手をつけなかったと書いてありました。そして、コメントとして、しばらくこちらの食事に慣れるまで「プリングランチ」つまりお弁当を持って来た方が彼女が安心するのではないかと書かれてありました。なるほど、言われてみればその通りで、家での食事内容は日本にいた時とほとんど変わっていないのですから、舌にまだ馴んでいない食べものを、ただでさえ不安な学校で

食べられないのも道理なわけです。私は、さっそくその指示に従って次の日からはお弁当にすることにしました。そしてあくる日、次女は又お手紙を持たされて帰ってきました。それによると、今日は学校でもほとんど泣かなかったので、特に心配がなければ、このまま様子をみたらどうかと書かれていました。けれども私は、どうしても一度学校に見に来てくれという彼女の願いもあつたので、一度、学校の次女の幼稚園クラスを見学することにしました。

（幼稚園で）

子ども達が学校に行きはじめて五日目、金曜日に、私は一日次女の幼稚園クラスを見学してきました。その前にちょっぴり、私達が住んでいる場所と、この地域の学校について説明させて頂こうと思います。

とにかくアメリカは広い国です。夏休みに隣りの州であるフロリダ州にあるディズニーワールドへ行った時も、延々と続く高速道路を見て、何度、このままこの自

動車が飛行機になって早く目的地へついでくれないかと思ったことでしょう。八時間の片道の道のりでやっと隣りの州なのです。かように広いアメリカのことゆえ、私達の体験は、丁度盲目の人が、象のことを説明するのに、ある人は鼻だけをさわってそれが象のすべだと思いい、又ある人は足だけをさわってそれが象だと思ったのと同じ間違いを私自身もしかねません。そこで、ここが私が見学してきた幼稚園を取りまく社会的な環境についてちょっとお話ししておこうと思います。

☆ジョージア州ピーチツリー市

私達が住んでいるのは、アメリカ東南部に位置しているジョージア州の州都であるアトランタ市の南西四十マイル（約六十キロ）のところにあるピーチツリー市という小さな町です。人口は現在約一万六千人の計画都市で、町の雰囲気は、日本の蓼科を平地にしたような自然に恵まれた環境の良い町です。ここは市が率先して工業誘致をしていることもあって、ここ二三年は、日本企

業の進出も目ざましく、TDK・横河電機・ナショナル

パナソニック・星崎電機・川崎ローダー・ヤマハ・古河

電工などが工場やオフィスをかまえています。ですからアメリカの郊外の町としては、日本人が多いのが特徴です。幼稚園から高校二年生までで約八十六名おり、まだまだ増える気配です。家族や、その他の赴任者を入れれば二百名を越す日本人が一つの小さな町に集中していることになります。これはニューヨーク近郊やロサンゼルス近郊を除けば、南部としては、一番日本人のいる割合の高い町ではないかと思われます。何故日本人がこんなに集中しているのでしょうか。理由は二つ挙げることが出来ます。一つには、市自体が、工業誘致を積極的に行っていることが挙げられます。又、もう一つの要素は、ここピーチツリー市の属しているカウンティ（郡）が、ジョージアの中で一番レベルが高いことが挙げられます。日本人はどうしても、安全度が高く、教育環境が良い所に好んで住みたがる傾向があるので、この近くに工場を持っている会社の方々も、住むのはこの町にして

いる場合が多いのです。

☆教育環境

アメリカでは、カリフォルニアアチーブメントテスト（略称CAT）というのがあってそれで全米の州のランク付けが発表になるのですが、ここジョージア州は、残念ながら、後ろから数えた方が早い場所に位置しています。けれども（まあ、かといって五十歩百歩なのです）その中でファイエットカウンティは一番成績が良いことになっています。カウンティ自体も教育熱心で、教育熱心ということは、それだけ教育にお金を使えるだけの豊かさがあることを意味しています。教育後進州のせいか、或いは、ここファイエットだけに限られるのか、今の私にはその判断材料がないのですが、ともかく、ピーチツリー市の次女の通っているオークグロブエレメンタリースクールは、やはりとても教育熱心で、なんと幼稚園からしっかり勉強しているのです。日本の小学校と同じような内容をしっかりやっているわけです。その

理由の一つとして、先程述べたCATがあることが挙げられます。このテストは、幼稚園の終わりの時点にあって、ある点数に達していないと、一年生に進級できないのです。これには私もびっくりしてしまいました。何でも一年生に上がる前にテストがあるのでしょうか。事の是非はともかく、ジョージア州としては、このテストを受けてそれを進級の判断材料にしていることは事実です。もちろんこういうことを疑問に思うのは、一人外国人の私のみではなく、丁度CATが終わった季節に、新聞にも、幼稚園生という幼ない時期にこういうテストを受けさせてそれを判断材料にしていることの是非について、心理学者が反対の意見を述べてありました。様々な意見がありながらも、一応今の時点では、これを受け入れているのがジョージア州の実状というわけです。

☆授業をしている幼稚園

今述べたような状況のため、この幼稚園も全く一年生と同じように授業をしています。私が初めて見学させて

もらった時は、そういう背景をまだ全く知りませんでしたから、本当にびっくりしてしまいました。私はアメリカに対して、本当に漠然としかイメージを持ち合わせてはいなかったのですが、それにしても幼稚園から授業をしているとは、全く思い至りませんでした。

次女のクラスに入った時は、もう授業がはじまっていました。二十二〜三人を担任の先生とエイド（助手）の先生の二人で受け持っています。それぞれのテーブルでグループになって四〜五人が一グループです。日本のように一斉に黒板を向いて何かをするというのはほとんどありませんでしたが、アルファベットのサウンスを練習する時はクラス中そろってやっていましたし、スライドを見る時（この時は『種の旅』という理科教材でした。）は、隣のクラスと合同でした。あと国語や算数にあたるものを学習する時は、グループごとに先生が回ったり、グループで先生のところへ動いていってやっているようでした。午前中に一度、四十分ぐらいの長いお休み時間―これはスナックタイムと呼ばれていて、家か

ら持ってきたおやつを食べたり、決められた曜日には注文しておけばアイスクリームも食べられる時間なのです。ともかくびつくりすることばかりでしたが、食べ終わると、運動場（といっても原っぱといった方がふさわしい校庭です）で、おいかけっこをしたりして遊んでいました。この日は、私がいたせいか、次女はとても元気で、まだ五日目というのにお友達と動き回っていました。そのあと、また一勉強して、ランチの時間となり、そのあとまた遊んで、幼稚園では、マットに横になってお昼寝の時間がありました。

私は、へえーっ、こんなにしっかりと勉強をやらされているのかと本当に驚きました。もっと自由に伸び伸びと遊ばせてくれるとどこかで思い込んでいたのですから、それは一種のショックでした。それに、アメリカンスクールへ行く二日前にはじめて行った日本語学校（これはアトランタの北にあって、この地域の日本人で希望する人のために開かれている土曜日一日だけのアトランタ補習校のことです。）の幼稚部でも、なんと「お勉

強」をしていたので、今迄よく遊ばせてもらえる幼稚園に通っていた次女が、こういう環境で本当にやっていかれるのかどうか不安でたまりませんでした。

アメリカン・スクールでは、「廊下を走る子ども」は一人もいません。何故かというと教室間の移動はトイレに行くことを除いて、ほとんどライン・アップ、つまり一列に並んで移動するためです。これもまた私にとっては、初めての体験で、小学校や幼稚園での休み時間、遊び時間の騒々しさに慣れている私にとっては、とても奇妙に感じられました。この奇妙さは、飼いならされているこちらの犬が、主人の前でとても礼儀正しく従順なのをみてびつくりするのと同じ種類のものでした。ともかく外でも犬が吠えません。私は、こちらの犬はなんとしつけが行き届いているのだらうと感心してしまったのです。六か月経った今の印象はまた違うものを持っているのですが、幼稚園から小学校年齢の子どもの達の学校での静かさの印象も、また同様のものとなっています。ただ一か所だけ、私が本来のものと思える喧騒が残っていた

のは、ランチルームでした。ここでは本当に騒がしく、まさに、ここに居るのは「子ども」だと思ったものです。

（見学のあとで）

ともかく、かようにして一週間は過ぎ、次女に限ったことですが、この一週間で、恐れも驚きもすべて出きってしまったせい、あとは時が経つにつれて、日本にいた時以上に自由に闊達な子どもにもみえがえっていききました。月曜日から土曜日まで勉強に行っている、日本にいた時より、より自由な印象を彼女から受けるのは、一体何故なのだろうか、というのが今の私の持つ疑問なのです。

今回は全く触れなかった上の二人については、また別なチャンスにお話しさせて頂こうと思っています。彼らは、最初泣けなかった分、背に重荷をしょってしまい、それはみていてつらいとしか言いようのないものでした。

でもとにかく、私達は家族五人でこの地に暮らさなければならぬのです。

人間として触れあえるまでに現地の人とやりとりが出来るまでの道の何と遠いことか……。住んだり、人と触れあえば触れあう程、言葉を持たないものかしさを感じます。そして言葉を持たないという意味では、ゼロから出発した子ども達のつらさは、多分私達の想像を越えるような体験だと思うのです。

今、まだ六か月、すべてのことが進行中で、あまり何もまとめて何か言うことが出来ません。この次、又、皆様にメッセージをお送りできる時は何かが見えていることを望みながら、このへんでペンを置かせて頂こうと思います。サンダーstormのち晴れとなることを祈りながら。

年があらたまり、迎えた三学期の保育
日数は六十日足らず。子どもたちの三学
期は日々満ち満ちて、陽溜まりに遊ぶ子
の柔らかな表情は、寒風に走る子の輝く
瞳は、確かな未来を約束してくれる。自
然がこの季節に春を約束してくれるよう
に、この頃の子とも達は、私に『希望』
を教えてくれる。先生方、両親をはじめ、
人に愛され、慈しまれて、小さな小
さな芽を結ぼうとしている。

(二月某日 日記より)

昨年の四月号から隔月ごとに連載して
くださった、鮑田典子先生「臨床の現場
から子育てを考える」浅野恵美子先生
「南の島の子どもたち」が、先、今月号
で終了いたします。わかりやすい具体例
と共に多くの示唆を与えてくださった両
先生に心よりお礼を申し上げます。また、
両先生は（昨年十二月号で連載を終わら
れた堀内守先生も）、この「幼児の教
育」誌の部数拡張のためにいろいろとお

知恵を貸してくださり、私、新米編集員
をいつも励ましてくださいました。あり
がとうございました。

土屋とく先生編「保育の原点を探る
倉橋惣三「保育法」講義録」が前号から
始まりました。土屋先生も文中でいつて
おられるように「頁を繰るうち、私は胸
の高まりと感動を抑えることが出来なか
った。そこには『保育法』の講義内容
が、生の声そのままに一言半句おろそか
にせず細密に記録されてあった。と同時
に私自身、長い間疑いの域を出なかった
幾つかの事柄が、明快に説かれていたか
らである。」
(本誌88巻一月号)
教育改革が叫ばれている昨今、「変わ
ることと変わらぬこと」(同M・H・
氏)への論議が、この講義録を読まれた
方を中心に静かに広がることを期待して
います。地域で、保育所で、幼稚園で、
そして研究者の間で。
今年も、子どもの近くにいる大人とし
て良い一年になりそうです。

(Y)

幼児の教育 第八十八巻 第二号

二月号

©

定価 四〇〇円

一九八九年 一月二十五日 印刷

一九八九年 二月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二一七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

遊びを育てる 指導計画作成資料集

実践に役立つ三大特長

1. 月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて0～2歳児の発達段階がわかり、保育のめやすがつけやすい。
2. 子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3. 子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。



保育が変わると子どもが変わる!! 本吉圓子“生き生き保育”の真髄

あせらないで待つ保育、つまずかせて学ばせる体験保育、子どもと保育者との一对一の保育、遊びの大切さを保育の信条とした本吉圓子保育の長年の実践を年齢別三分冊にまとめた保育関係者の必読書!

子どもの遊びと指導のポイント①

0歳児の保育

第1章は、月別に実践例をとりあげ、それぞれの月の保育のポイントを付記して、指導の流れがつかめるようになっています。第2章は、4月に同時に入園してきた三カ月齢児と九カ月齢児の事例を並記して、その発達段階の差による保育内容のちがいを明らかにしています。

子どもの遊びと指導のポイント②

1歳児の保育

1歳児は、一生の中で田親を最も必要とする時期です。集団生活を求めない1歳児に対して、子どもの心を大切にする保育の実践例をまとめました。1章・2章には月別の子どもの遊びの変化をとりあげ、指導のポイントを付記しました。子どもの発達を正しく理解することができ、探索活動を生かした指導計画作成に役立ちます。

子どもの遊びと指導のポイント③

2歳児の保育

第1章は、子どもの姿と指導のポイントを並記して、子どもの生活がよくわかり、指導の手がかりがつかめるようになっています。2章では、年間指導計画や月案例などを紹介し、子どもが遊び込める指導計画づくりに役立ちます。3章は、子どもの遊び方の図解、4章は、たくさんの実践例を紹介しています。

0歳児の保育(228頁)・1歳児の保育(228頁)・2歳児の保育(232頁)

本吉圓子 編著 B5判・各定価2,000円・セット定価6,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

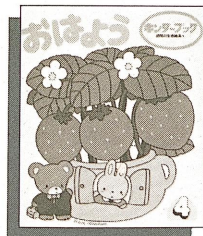
フレーベル館

'89 フレーベル館 月刊誌 ラインアップ

信頼をお届けします。フレーベル館の保育絵本

はじめての生活絵本

キンダーブック 幼児の生活絵本①



●3歳児のための生活絵本です。
●はじめて園生活を体験する子どもたちのために、やさしさをたっぷり盛りこみました。

★L判/22頁/付録母親向け解説書(こぐま通信)/4月号特別付録「いちごシール」「このほり」/250円

やさしい心を育てる生活絵本

キンダーブック 幼児の生活絵本②

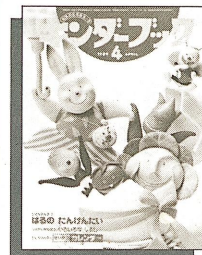


●4歳児のための生活絵本です。
●園生活を十分楽しみ、自分を知り、友だちと親しむ子どもたちのために、くふういたしました。

★A4ワイド判/32頁/特別付録「かいじゅうくん指人形」「せいかつページ用シール」「このほり」/300円

観察する目を育てる生活絵本

キンダーブック 幼児の生活絵本③

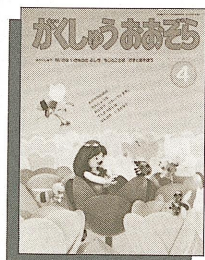


●5歳児のための生活絵本です。
●自然科学面から、また社会面から「生活」を総合的に観して、いく目を育てるお手手を行います。

★A4ワイド判/36頁/特別付録「せいかつカレンダー」「せいかつカレンダー用シール」「このほり」/300円

幼児の学習意欲を 生みだす

かくしゅうおおぞら



●5歳児を対象とした総合学習絵本。
●子どもたちの生活から身近な題材で遊びながら、知る、覚えるの楽しさを学びます。

★A4変形判/36頁/別冊付録「おかあさんのほん」/特別付録「あいさつおひょう」/300円

自然の不思議を 感動的に伝える

しぜん——キンダーブック



●子どもの興味と関心の芽ばえに、身近な動物を通してやさしく語りかける科学絵本。
●美しいスローリリズムの世界！

★L判/32頁/上製本/特別付録「このほり」/350円

園生活で はじめて出会う絵本

ころころえほん

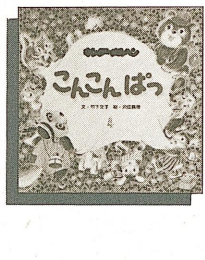


●先生やお母さんとともに、あたたかいスキップのお手伝いをします。
●リズムカルで、単純明快なおはなしを繰り返します。

★A8判/20頁/特別付録「おべんとうシール」「このほり」/250円

絵本を開く楽しさをあたえる

キンダーメルヘン



●子どもたちの豊かな創造力をケンギン伸ばします。

★L判/28頁/特別付録「このほり」/270円

夢と感動する心を そだてる

キンダーおはなしえほん



●子どもたちの夢と感動する心を大切にはぐくむおはなし絵本です。

★L判/32頁/上製本/特別付録「このほり」/350円

永遠に忘れられない名作絵本

キンダー名作選



●キンダーおはなしえほん20年の歴史の中から、語り継がれた評判作を厳選してお届けします。

★L判/32頁/上製本/特別付録「このほり」/270円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館